

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第109号

遺跡抄報 馬場南遺跡第2次調査の成果	伊野近富	1
亀岡盆地、桂川左岸の地形形成とその利用	中川和哉	7
平成20年度 京都府内における発掘調査とその周辺	小池 寛	13
平成20年度発掘調査略報		21
16. 室橋遺跡第17次		
17. 長岡京跡右京第952次・井ノ内遺跡		
18. 長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡		
19. 長岡京跡右京第963次・松田遺跡		
20. 女谷・荒坂横穴群		
21. 木津城山遺跡第6次・木津城跡		
遺跡でたどる京都の歴史6 平安時代の京都		31
長岡京跡調査だより・105		40
普及啓発事業		42
組織および職員一覧		43
センターの動向		44

2009年7月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



馬場南遺跡空中写真（東から）



彩釉山水陶器

（遺物撮影 田中彰）



三彩火舎型香炉



墨書土器「黄葉」



墨書土器「神雄寺」

(遺物撮影 田中彰)



# ばばみなみ 馬場南遺跡第2次調査の成果

伊野近富

## 1. はじめに

馬場南遺跡は、京都府木津川市大字木津小字糠田<sup>ぬかた</sup>に所在する。木津川市は京都府の南端にあり、奈良県と接している。

奈良時代の景観を復元した『木津町報告』に馬場南遺跡の位置を入れてみると、第2図のとおり、馬場南遺跡は平城京の北約5kmのところにある。京の北側には、奈良山丘陵が広がっており、丘陵東部を貫く2つの道は平城宮と東大寺から発していた。東大寺から発する道が、平城宮からの道と合流する手前300m地点に遺跡は位置しており、さらに北に行くと木津川に到達する。ここには、全国からの物資が集積する「泉津」であり、「木屋所」が設置されていた。また、恭仁宮造営時には右京の南東隅に位置していた可能性がある。井関川のある谷を東に行くと恭仁宮のある盆地に到達する。

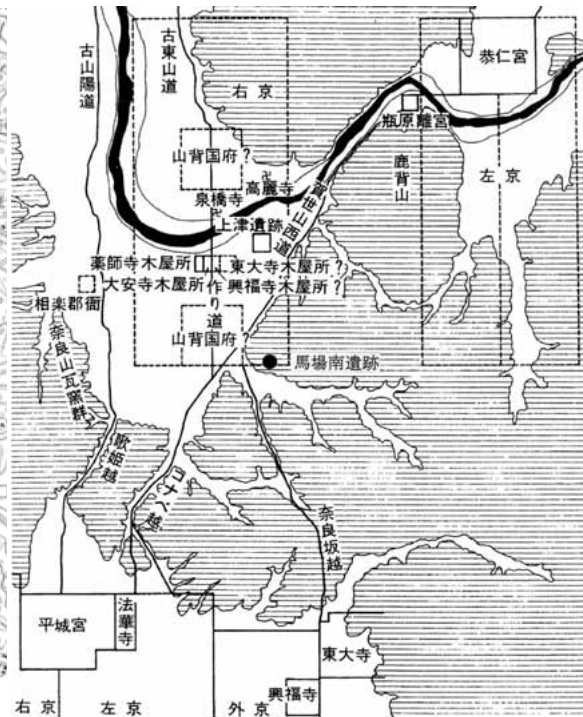
以上のように、馬場南遺跡は古代には幹線道路に近い、絶好の地に位置していた。

## 2. 調査成果

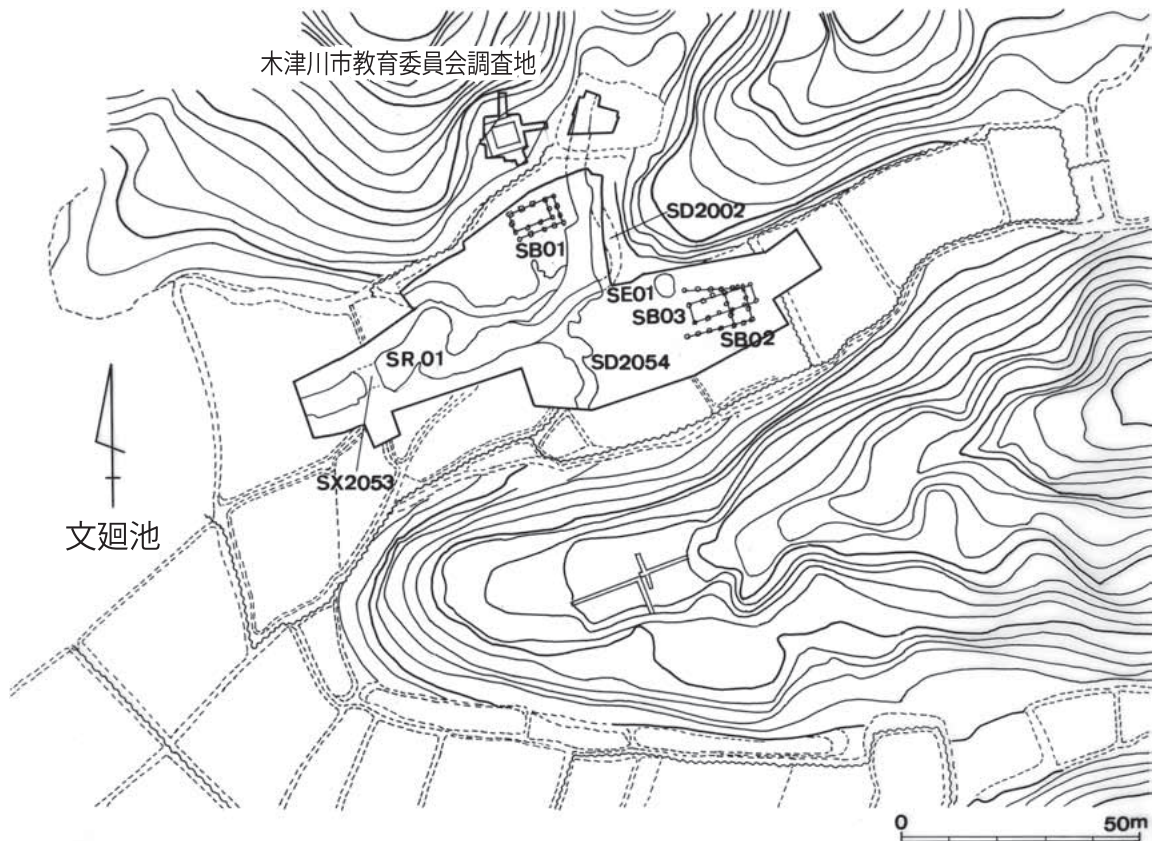
関西文化学術研究都市木津中央特定土地地区画整理事業に伴い、発掘調査は平成19・20年度の



第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/50,000 奈良)



第2図 平城京と調査地  
(『上津遺跡 木津町報告』第3集に加筆)



第3図 馬場南遺跡調査遺構配置図

2か年にわたって実施した。1年目の試掘調査では16か所に及ぶグリッド調査を実施し、遺跡の存在が明らかとなり、2年目に面的調査を実施した。第1次調査については報告されている<sup>(注2)</sup>ので、本稿では第2次調査の成果について報告したい。

地形を説明すると、調査地周辺は小さな谷と丘陵によって形成されている。谷部は耕作地となっており、丘陵地は山林となっていた。<sup>ぶんまわり</sup>文廻池に向かって谷は南西—北東方向に20度ほど振られて開口している。奈良時代の掘立柱建物跡SB01・02・03もほぼ同じ方位であり、これらは地形に制約されていたと考えられる。

検出した遺構は、掘立柱建物跡と川跡、溝などであり、遺構密度はそれほど高くはない。

掘立柱建物跡SB01は、調査地北部の平坦地（標高約49m）にある。北側から派生した尾根の先端にあたり、東西20m、南北25mの範囲が平坦に削られていた。その北東部で掘立柱建物跡SB01を検出した。主屋は東西3間（8.1m）、南北2間（4.2m）で南と東に庇を設けている。掘立柱建物跡SB02は東側のやや高い面（標高約51m）にある。東西2間（4.2m）、南北3間（7.2m）で、これを壊して掘立柱建物SB03が建てられている。東西5間（13.5m）、南北1間（3.9m）である。柵SA01も同一場所にあり、長さ11.2mを確認している。井戸跡SE01は掘り方の直径3m、井戸枠は一辺1mの方形である。

川跡SR01は、掘立柱建物跡SB01が立地する高台の東側から南側に屈曲して流れる川である。幅4～5m、深さ1～2mである。当初は自然流路であったものを一部埋め立てて掘立柱建物SB01を建設したようである。多量の灯明皿を廃棄した後、川幅を調節したようで、丸太な

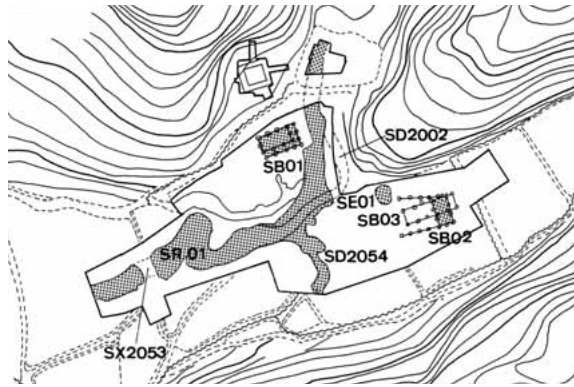


どで護岸していた。また調査地西部に堤を設け、樋を設置し、水量の調節をしていた（堤跡SX2053）。溝SD2002は、川跡SR01が埋没した後に掘られた溝で、川跡SR01とほぼ重複し、幅2m、深さ0.5mである。遺跡が廃絶する時期に多量の遺物をこの溝に廃棄していた。2か所で灯明皿の多量投棄が認められる。

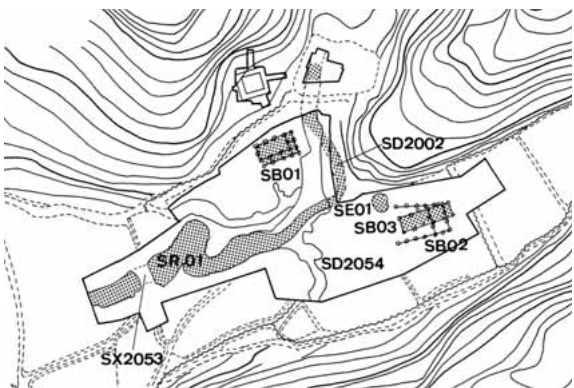
以上のように、遺構の数はそれほど多くない。これに対して出土遺物は種類も量も豊富である。多量の土師器（皿・杯・甕など）・須恵器（杯・皿・壺・鉢・平瓶・円面硯・鼓胴〔第8図10〕など）奈良三彩や緑釉の施釉陶器片約100点（壺・香炉・山水の造形品ほか）、墨書土器約100点、建築部材をはじめとした木製品、万葉歌木簡1点を含め木簡5点、軒丸・軒平瓦約40点およびその他がある。

掘立柱建物跡SB01～03と井戸跡SE01からは少量の土師器・須恵器とともに瓦片が出土した。掘立柱建物跡SB03の柱穴から平城宮式瓦（奈良時代後期）が出土した。井戸跡SE01では三彩壺（浄瓶）が出土した（第1次調査）。川跡SR01や溝SD2002では多量の遺物が出土していて、特に注目される遺物として（1）灯明用と思われる土師器・須恵器、（2）施釉陶器、（3）墨書土器、（4）木製品、（5）木簡、（6）瓦・瓦埴およびその他がある。

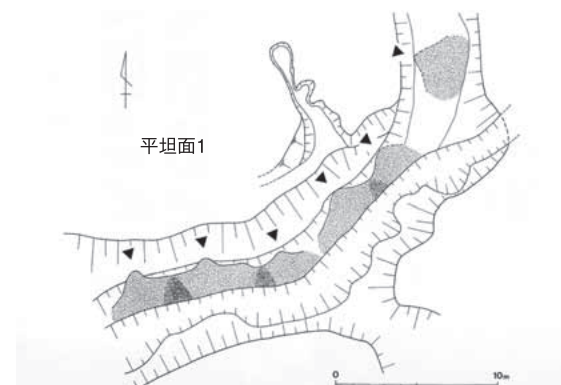
（1）の土器は、高台側から川の北斜面に廃棄されていた計8,000点以上の土師器皿が注目される。多くの土師器皿には油煤が付着（ほとんど1か所）しており、灯明皿としてほとんどのものが1度だけ使用されたことがわかる。北側の高台から南側の川斜面に捨てられた状況が6か所で確認できた（第6図）。1か所で約1,500点の皿が捨てられていた。（2）の施釉陶器には、緑釉陶器や三彩陶器（奈良三彩）があ



第4図 奈良時代中期の建物と溝のようす



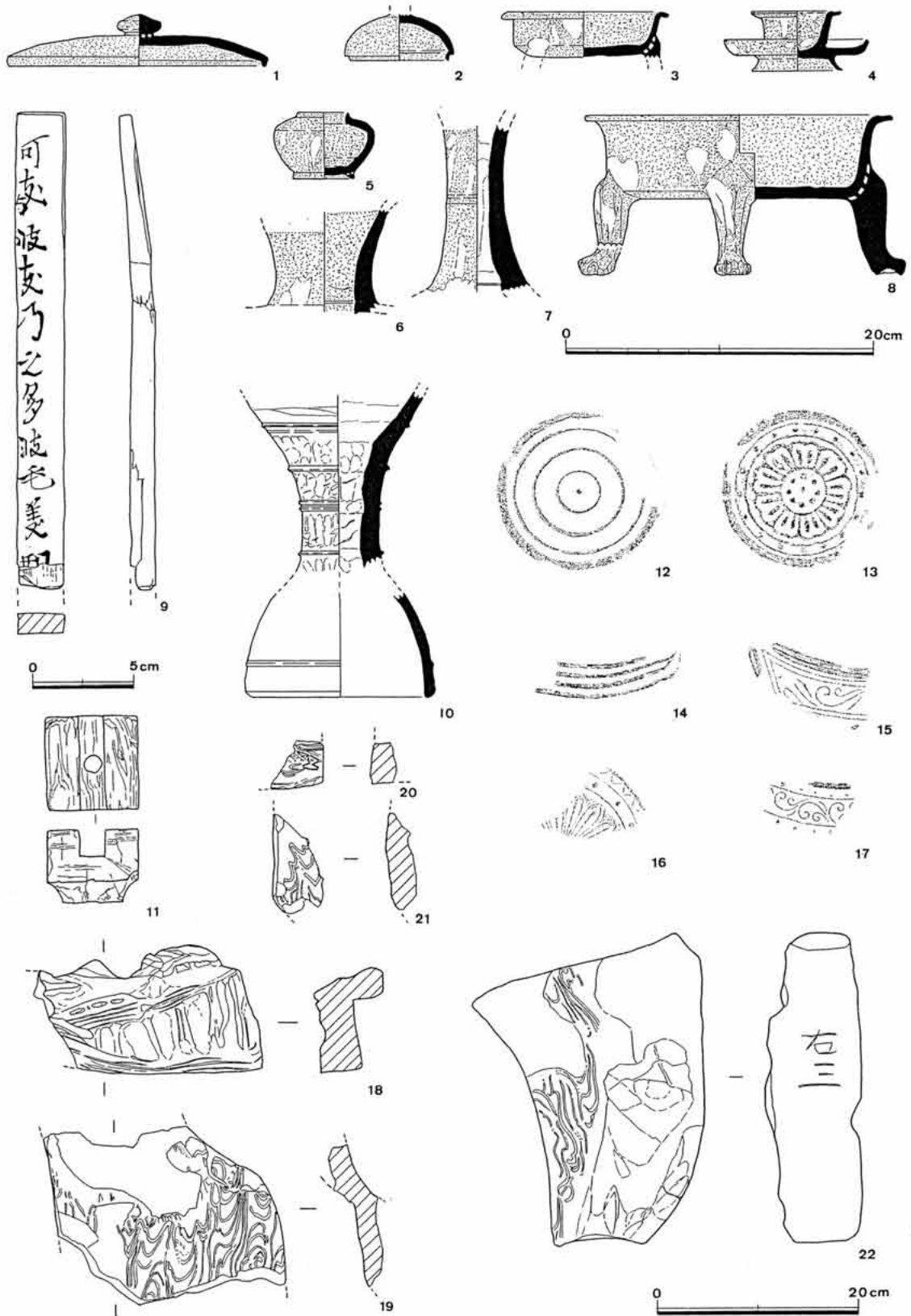
第5図 奈良時代後期の建物と溝のようす



第6図 灯明皿集中か所（▲印）



第7図 灯明皿検出状況（西から）



第8図 出土遺物実測図

1. 三彩蓋 2. 緑釉塔椀蓋 3・8. 三彩火舎型香炉 4. 三彩托 5. 三彩壺 6. 三彩浄瓶  
7. 三彩水瓶 9. 万葉歌木簡 10. 須恵器鼓胴 11. 卷斗 12・13・16. 平城宮式軒丸瓦  
14・15・17. 平城宮式軒平瓦 18～22. 彩釉山水陶器

る。緑釉陶器には塔<sup>とうまり</sup>椀蓋（第8図2）1点があり、三彩陶器には4足の火舎型香炉（第8図8・巻頭カラー）や托・杯・蓋・小壺・浄瓶などがある。また、水面を表現した水波紋や、岩や山を表現したもので、今回、彩釉山水陶器と仮称する一群もある（現地説明会段階は須弥山様陶器と表現）。彩釉山水陶器は、刻書2点（「右三」[第8図22]・「左五」）、墨書1点（「東廿一」）をはじめ約60点が出土した。（3）の墨書土器は90点以上出土した。「黄葉」・「神」・「寺」・「神寺」・「神雄寺」・「神尾」・「大殿」・「造瓦」・「□利諸□」などの文字が判読できた。「黄葉」はもみじ、「神雄寺」・「神尾」、第1次調査で「山寺」と墨書されたものもあることから、この周辺に「神雄（尾）寺」と呼ばれた山林寺院があったことが想定できる。また、「大殿」は寺以外の性格を有していたことを示唆しているのかもしれない。（4）は巻斗をはじめとする建築部材や下駄などの生活用品がある。（5）木簡は5点出土した。いずれも川跡SR01から出土した。この内1点には「阿支波支乃之多波毛美智（カ）」（以下欠損）の墨書がある。現存長23.4cm、幅2.4cm、厚さ1.2cmで、途中で欠損している。左側が割れており、字の残り具合から、元は3cm程度あったものと推測される。「あきはぎのしたばもみち」と読めるので、これは『万葉集』巻10の2205番の歌「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも」の上11文字に相当する。ほかには、いずれも欠損しているが、「山背国」、表面に「大將軍・・・」、裏面には「ム名以天罡・・・」と書かれたものや「廿一日用」、「□五斗」がある。<sup>(注3)</sup>（6）の瓦およびその他には軒丸瓦7種16点、軒平瓦5種15点、不明5点が出土した。いずれも平城宮式の瓦である。奈良時代中期から後期のもの（瓦編年の平城Ⅱ期とⅣ期に集中する）である。また、不明製品には材質がガラスと思われる細い管状製品がある。さらには、祭祀に使用されたと思われる土馬、和同開珎・萬年通寶などの銭貨、製塩土器、ふいご羽口、鉾滓などがある。

なお、遺跡の広がりを知るために、谷の南側にある丘陵上を試掘調査したが、遺構・遺物とも希薄であった。しかし、谷の北側にある丘陵端を調査した木津川市教育委員会の調査では、仏堂と推定される小規模な礎石建物が確認され、遺跡は北側に広がっていたことが判明した。ここでは、奈良時代の瓦とともに四天王の塑像片や塼仏が出土した。

### 3. 今回の調査で判明したこと

①川跡SR01の周囲に掘立柱建物3棟が点在していたこと、また同時に建てられたのは2棟程度であることがわかった。時期は土師器や須恵器から奈良時代中期から後期（8世紀中葉から後葉）である。

また、掘立柱建物跡SB01の北約10mの地点で実施された木津川市教育委員会の調査では、小規模ながらも、建物構造が極めて珍しい礎石建物1棟が確認された。

②川跡SR01は、長さ100mほどを確認した。出土遺物の多くは8千枚以上の土師器皿で、その多くが灯明用で、川の北岸に埋没していた。おそらく、ここで何らかの法要がおこなわれたと想定できる。新しく溝SD2002が掘られ、この溝内でも2か所で多量の灯明皿が確認できることから、新しい時期にも法要のあったことがわかる。なお、奈良時代の文献には燃灯供養という表



現がある。

③「神雄寺」・「神尾」と呼ばれた寺が存在したことが、ほぼ確実である。しかし、奈良時代の文献には記載が無く、新発見の寺である。寺関係の墨書は奈良時代後期の土層から出土した。

④緑釉陶器や三彩陶器の質・量は全国でも屈指である。特に、施釉された山水陶器に類似するタイル状の緑釉水波文埴は、出土例が平城京内の大寺院がほとんどで、国家あるいは貴族の持ち物であったことが想像できる。山水陶器がまとまって出土したのは全国で初めてである。これらの製品を文献に見える阿弥陀浄土変の瑠璃地や池敷とする意見もある。<sup>(注4)</sup>ヘラによる水波文は、奈良時代中葉の東大寺上院地区出土例と似ており、時期は8世紀中葉と考えられる。<sup>(注5)</sup>

⑤墨書土器に「大殿」がある。この用語は大きな建物という意味から転じて、それらを使用する天皇や大臣クラスの人物を指す。この遺跡の成立時期の天皇である聖武天皇や光明皇后を筆頭に、当時活躍した橘諸兄（およそ10年間にわたって1人だけで大臣を務めた）、橘奈良麻呂及び藤原四家との関連が注目される。

⑥『万葉集』巻10に載っている歌が書かれた木簡が出土したことは、あるいはこの地で歌会が行われたことを窺わせる。歌1首が1行に書かれていたとすれば、60cmを超える長大な木簡と推定できる。今回の例は歌会用に作成された可能性が高い。<sup>(注6)</sup>万葉集は全20巻のうち16巻までが746年から数年の間に編纂されたと言われており、木簡が川跡に埋没した時期に近く、万葉集成立期の状況を知る上で重要な資料になった。

⑦出土した瓦は平城宮式のものである。この点から言えば寺との関連は希薄である。掘立柱建物が3棟、礎石建物1棟という構成も、寺だけではなく、たとえば貴族の別荘や離宮（頓宮）などの施設の存在を示しているのかも知れない。遺構の状況から、2時期に分けられる点に留意して検討したい。また、同時併存の可能性も視野に置きたい。

以上、馬場南遺跡の調査成果は考古学をはじめ、古代史・国文学など、幅広い分野に影響を与えることは確実である。今回の調査に関しては、多くの研究者、行政関係者のご教示を受けた。記して感謝したい。今後、整理作業を進めて、基礎的な研究材料を早急に報告したい。

(いの・ちかとみ 当調査研究センター次席総括調査員)

注1 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985や伊野近富「恭仁宮と恭仁京の復原」『京都考古』第63号 京都考古刊行会 1991

注2 竹原一彦「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成19年度調査報告 馬場南遺跡第1次」『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2009

注3 奈良文化財研究所の赤外線写真で判読した。その際、渡辺晃宏氏をはじめ、多くの方々よりご教示をいただいた

注4 大阪大学高橋照彦氏のご教示による

注5 高橋照彦「仏像荘嚴具としての緑釉水波紋埴」『日本上代における仏像の荘嚴』奈良国立博物館 2003

注6 栄原永遠男「木簡として見た歌木簡」『美夫君志』第75号 美夫君志會 2007

# 亀岡盆地、桂川左岸の地形形成とその利用

—発掘調査から見た見解—

中川和哉

はじめに

亀岡盆地は、京都市に隣接した盆地で亀岡市、南丹市の一部がその中に位置している。この盆地の中央部を、北西から南東に貫いて1級河川である桂川(地元では保津川と言われている)が流れ、保津峡の狭隘部分をとおり、嵐山にいたる。

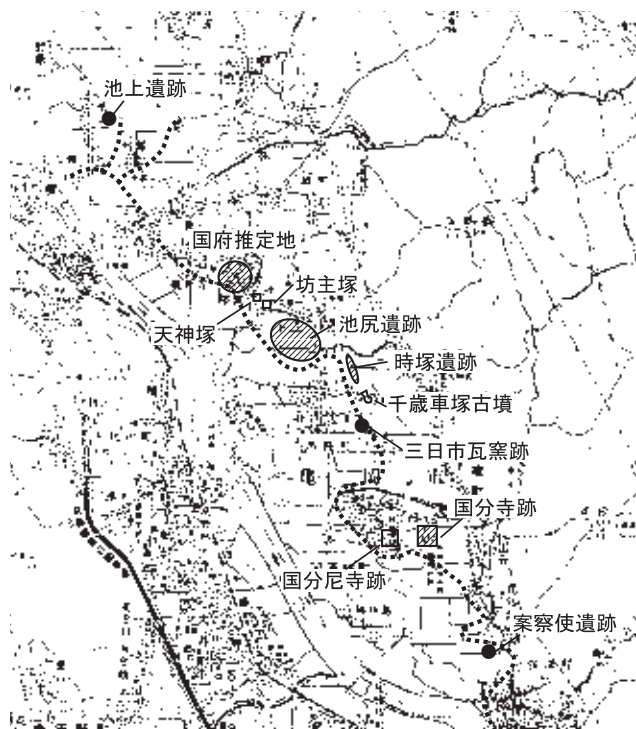
現在亀岡盆地では、桂川の右岸地域にJR山陰線や国道9号線、高速道路が走り、経済的にも発展してきた。そのためこれらインフラの整備に伴う大規模開発によって、多くの遺跡がいち早く発掘されてきた。一方、左岸地域は水田が広がる農耕地として利用されてきたため、発掘調査の機会が少なかった。しかしながら、この左岸地域には丹波国分寺跡・国分尼寺跡、丹波一宮である出雲神社、6世紀の古墳としては丹波地域最大の前方後円墳千歳車塚古墳が存在しており、古代における丹波国の中心地であったことが想像されていた。

10年ほど前から、左岸地域のインフラ整備の一環として道路の新設、圃場整備など大型の開発が進められ、それに伴う発掘調査によって多くの遺跡が調査されるにいたっている。当調査研究センターが実施した発掘調査の成果については、順次、報告書によって発表してきたところである。

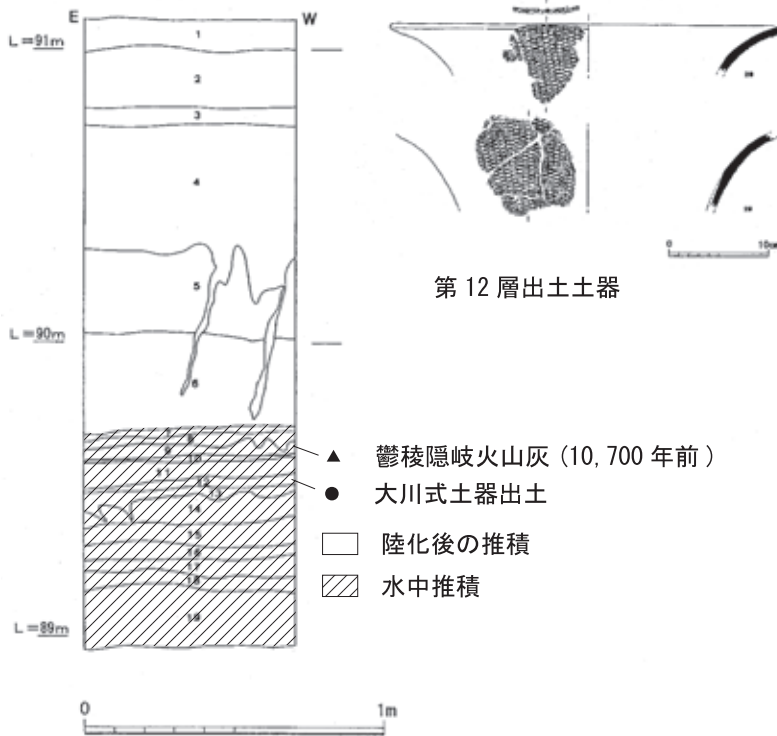
今回は、左岸に見られる段丘地形の形成時期や堆積物、自然環境の利用といった観点から、これまでの成果をまとめていきたい。

## 1. 段丘の形成時期

左岸域にはいわゆる氾濫原といわれる地域と比高差最大5mに及ぶ段丘崖を持つ平坦面があり、現在は水田が広がっている。『新修亀岡市史』(2002)では、低位段丘面として位置づけられている。この段丘崖は亀岡市保津町から南丹市八木町北広瀬に至り、筏森山を頂とする山塊まで続いている。この低位段丘面上に寺院や古墳といった大規模な遺構群が存在しており、段丘崖は国分寺の瓦を焼いた登窯の斜面として利用されている(第1図:森島ほか2005)。



第1図 亀岡市桂川左岸の低位段丘上の主要遺跡



第2図 案察使遺跡土層柱状図

この段丘の下が沖積地にあたるが、その形成時期を正確に類推する根拠は乏しかったが、亀岡市保津町の案察使遺跡第5・6次調査で、段丘崖の直下から縄文時代早期の土器が発見された(中川ほか2005)。土器は大川式押型文土器で、約10,700年前に降灰した鬱稜<sup>うつりょう</sup>隠岐火山灰層の下から出土した(第2図)。堆積層は、地表下2.2mまで確認したが、1.6mまでが陸成層で、それ以下が水成層である。水成層上部はシルトが堆積

し、地表下2mで砂層に変わり粒度が変化する。シルト質の堆積層は、湖沼成の堆積物でこの中に火山灰が単層として検出できた。花粉分析も同時に実施され、湿地林を形成するハンノキ属のほか、沼沢湿地指標群の珪藻化石類が検出されており、地層から解釈されるこの水成堆積物の成因と一致する。段丘崖の形成は1万年以前となり、段丘は低位段丘であることが明らかになった。そしてまた、後背湿地が存在し、やがて陸化し、現在の沖積地の景観を作り出していると仮定できる。

## 2. 低位段丘上の堆積物

低位段丘面上は比較的平坦ではあるが、盆地を形成する東側の山の崖<sup>がいたい</sup>錐性堆積物が、山麓に広がり、その山地を源とする小河川によって開析されている。平坦で水の作用を受けていない地域では、黒ボク層、黄褐色粘質または砂質層、砂層または礫層と地層の性格や土色の面で共通した状況を示している。こうした更新世以前に形成された地形面における層相は、丹波山塊に点在する盆地では一般的である。

黒ボク層は、日本列島の各地で発見され、その成因については統一的理解が得られていない。しかし、完新世の堆積物で、縄文時代の初めには形成されていたことがわかる。丹波山塊に連なる、中国地方の岡山県恩原遺跡(稲田編1996)では、黒ボク層では縄文土器が、漸移層では旧石器時代末の細石刃文化期の遺物が、その下には後期旧石器時代のナイフ形石器文化期の遺物が検出されており、近畿地方に隣接する地域においても同じ年代を示している。

桂川左岸の低位段丘面では、発掘調査で黒ボク層を取り外し黄褐色土の上面で遺構の検出に努



めることが多いが、黒ボク層中から土器の集積が確認できることも少なくない。こうした遺物集中部を残し、掘り下げると黄褐色土上面で遺構が検出できる。これらは黒ボク層中に遺構の切り込み面があることを示しており、条件がよければ黒ボク層中で遺構を検出することが可能である。

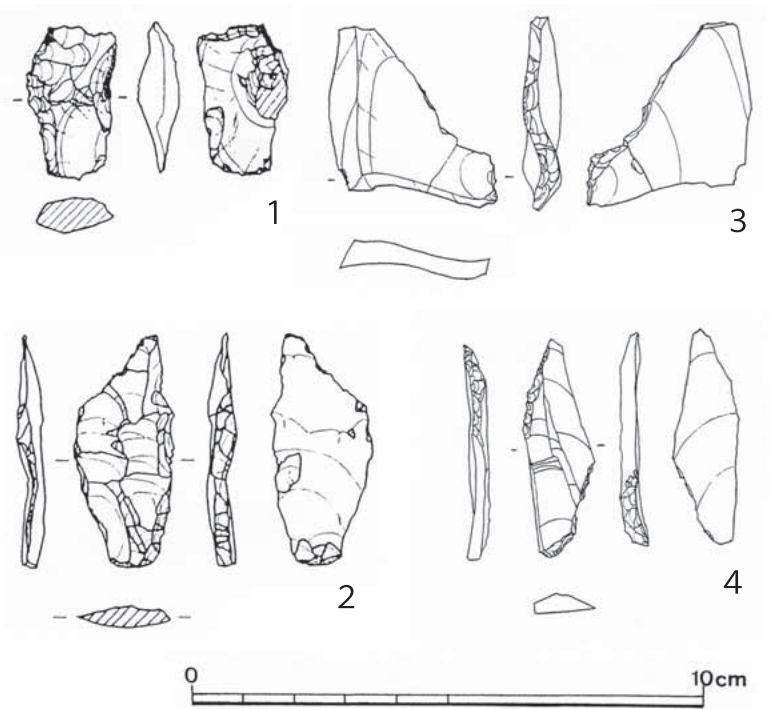
こうした遺跡の中で、亀岡市<sup>ときづか</sup>時塚遺跡や南丹市<sup>いけがみ</sup>池上遺跡では、包含層ではあるが、低位段丘面から旧石器時代の石器が出土している。

更新世形成面からの出土事例であり、低段丘面であることを傍証している。

時塚遺跡第15次調査では、第3図4で示したように、チャート製の2側辺加工のナイフ形石器が出土した(石崎ほか2009)。打面部分は切り取られており、二次加工はすべて主要剥離面側から行なわれている。背部の一部には、節理面が利用されている。3も同じく第15次調査で出土した白色のメノウを利用した剥片で、山形の調整された打面頂部を加撃し、横長の剥片が作り出された。剥片には底面が存在する。剥片は打点付近から、剥片の打撃軸方向に割れており、剥片作出時に同時破碎したものと考えられる。平面の剥離方向や山形の打面調整から考えると、瀬戸内技法に伴う翼状剥片と考えられる。

池上遺跡第8次調査では、チャート製の縦長剥片を利用したナイフ形石器(第3図1)と縦長剥片が出土している(田代ほか2002)。ナイフ形石器は打面部を基部に用い、2側辺に主要剥離面から加工されたものである。第3図2は第13次調査で出土したチャート製の台形石器である(中川2004)。剥片を横に用いて両側辺に加工が施されている。近畿地域では後期旧石器時代の石器はサヌカイトが用いられることが一般的であるが、これまで亀岡盆地で発見されている後期旧石器時代の石器はチャートやメノウが用いられており、異なる傾向を示している。同じ山塊の盆地にある兵庫県春日七日市遺跡ではチャートを主体とする石器群が発見されており、地域的な変異と考えることもできる。

これら石器はすべて本来の包含層から遊離したものであるが、低位段丘面上の遺跡に限られる。また、その堆積層に見られる黒ボク層と黄褐色土の間には不整合は見られないことから、黄褐色土は更新世末期の寒冷期以前に堆積したものと想定される。本来の遺物包含層は、黄褐色土にあ



第3図 後期旧石器時代の石器  
1・2：池上遺跡、3・4：時塚遺跡

ったもので、遊離資料の存在がある場合は積極的に下層の確認調査をする必要があると考えられる。

### 3. 段丘上の土地利用

こうした段丘上は比較的平坦な土地が続くため、生産や居住に適していたと考えられるが、利用方法をこれまでの発掘調査の結果から検討を加えたい。

現在、桂川の左岸域は水田が広がる穀倉地帯となっているが、水位が低く桂川本流から用水を引くことは困難であり、段丘面上ではため池を利用した灌漑によって稲作がおこなわれている。自然の状態では段丘面を開析する小河川周辺以外では、水を確保することが困難である。こうした状況を示すように、段丘面のうちでも段丘崖縁辺の平坦地にある池尻遺跡・蔵垣内遺跡・時塚遺跡では弥生時代・古墳時代などの住居跡や墳墓が密集して検出されている。このことから水田に不適格な平坦地が居住域・墓域として利用されていたことがわかる。

段丘縁辺には、6世紀前半の丹波最大の前方後円墳千歳車塚古墳が立地しており、沖積地及び対岸から目立つよう造られている。

同じ段丘面に対応する南丹市池上遺跡は、東側にこの面を開析する小河川があり、この後背湿地部には遺構がなく、本来の平坦面部に弥生時代の竪穴式住居跡・方形周溝墓、古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡が検出されている。古墳時代後期の竪穴式住居跡は120棟以上発見されているが、発掘調査が圃場整備事業で削平される水路及び道路部分に限られていたため、その間の水田面に同じ密度で竪穴式住居跡があれば300棟を下回ることはないであろう。こうした集落を支えたのは、沖積地に展開したと想定される水田と考えられ、沖積面における水田調査が将来期待される。

またこの段丘面上では、方形掘形を持つ律令期の掘立柱建物跡も多く発見されており、奈良時代・平安時代にも居住地として利用されていたことがわかる。池尻遺跡では、大型の正方位を持つ掘立柱建物群が発見されている。平安時代には池尻遺跡近くの南丹市八木町屋賀に国府があったことが承安4(1174)年に原本が成立した吉富荘絵図でわかっているが、奈良時代のものについては諸説があり確定していない。しかしながら、池尻の地域は、段丘崖が弧を描き東西方向に向き、背後に差別浸食の結果生じた小さな丘陵を持っている。この南に開けた平坦面は南方向に盆地全体を見渡せ、国府の候補地としてふさわしい景観を持っている。石崎善久は、これまでの調査結果から方形の区画を復元し、条里と施工の計画軸との違いなどから公的な大規模施設が存在するとし、丹波国府または桑田郡衙の可能性を指摘している(石崎ほか2007)。また、政庁域は確認されていないが、遺構の広がりから国府の可能性が高いとしている。

### 4. 沖積地の利用

沖積地の発掘事例として案察使遺跡第4～6次調査(福島2003・中川ほか2005)における粘土採掘坑と考えられる土坑群がある。弥生時代中期から古墳時代まで利用された土坑群で、良好な粘

土層の部分で、壁面が外に膨れるいわゆる袋状土坑の形状を示している。土坑は礫層または砂質土層から掘られ、粘土層で掘り下げがとまり、下層の砂質土・礫層までは及ばない。内部からは土器、棒状の木製品などが出土している。

案察使遺跡の土坑が穿たれた粘土層中にはガラス質の火山灰がブロック状に含まれている。層位関係と特徴からアカホヤ火山灰と同定された。

案察使遺跡出土の弥生土器の胎土分析の結果、胎土中からアカホヤ火山灰のガラスの特徴を持つ珪長質薄手ヴァブルウォール型の火山灰が検出できた。また、池上遺跡でもアカホヤ火山灰のガラスが弥生土器の胎土中から発見できた。偶然堆積した量ではなく、ガラスの集積された粘土層から作られた可能性が高いとされる。弥生土器を作る粘土は、案察使遺跡に見られるような沖積面の湖沼成粘土層を利用している可能性が高いと考えられる。

地元の聞き取りでは、近年まで現在の水田面の下から瓦焼成用の粘土が採取されており、弥生時代にも同じ行為がおこなわれていたのかもしれない。

#### まとめ

桂川左岸に広がる段丘面は現在の景観とは異なり、古代以前には生産域ではなく、居住域や墓域として利用されていた。そしてその生活を支えていたのは、桂川の後背湿地に形成された水田であったと考えられる。段丘面は近年まで洪水を繰り返していた桂川の氾濫が及びにくい場所であり、土地の改変が安定していたとともに、水田耕作に適さない場所であった。

またこの地域を発展させたものとして奈良時代の古山陰道がある。この道は段丘崖縁辺に沿って直線状に造られたと推定され、国分寺や一宮をとおり国府推定地の1つである南丹市八木町屋賀にいたる。こうした大規模な施設は、平坦面が大きく張り出した部分に作られる特徴があり、道はその間をつないでいる。

近年の調査の結果これまで仮説的であった桂川左岸地域の歴史像が、大規模な施設が設置された背景となる集落遺跡や土地条件などが明らかになり、古代における丹波国の中心地として真に評価できるようになった。

(なかがわ・かずや 当調査研究センター調査第2課主任調査員)

#### 参考文献

- 亀岡市史編さん委員会編 2002『新修亀岡市史本文編』第1巻
- 稲田孝司 1996『恩原2遺跡』岡山大学文学部考古学研究室
- 中川和哉ほか 2000「池上遺跡第5次調査概要」『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉 2004「池上遺跡第13・18次調査概要」『京都府遺跡調査概報』第112冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中川和哉ほか 2005「案察使遺跡第5・6次調査」『京都府遺跡調査概報』第116冊 (財)京都府埋蔵



文化財調査研究センター

福島孝行 2003「案察使遺跡第4次調査」『京都府遺跡調査概報』第108冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

森島康雄ほか 2005「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成15年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第114冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

田代弘ほか 2002「南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第103冊

町田洋・新井房夫 2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会

石崎善久ほか 2007「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成16・17年度発掘調査報告」『京都府遺跡調査概報』第123冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

石崎善久ほか 2009「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成18・19年度発掘調査報告時塚遺跡第15・17次」『京都府遺跡調査報告集』第135冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 平成 20 年度

## 京都府内における発掘調査とその周辺

小池 寛

### はじめに

平成20年度に当調査研究センターでは、24件の発掘調査を実施しました。その中で関西圏ではあまり注目されてこなかった縄文時代の調査成果が脚光を浴びました。また、個別の遺跡では木津川市馬場南遺跡において万葉歌木簡や神雄寺と記された墨書土器、そして、山水を表現した施釉陶器などが出土し、今まで知られていなかった奈良時代の寺院跡が確認されました。この大発見は、新聞紙上でも大きく取り扱われ、現地説明会や当調査研究センター主催の埋蔵文化財セミナーは、熱心な考古学ファンで賑わいました。

以下、昨年度、京都府内で実施された主な発掘調査成果について時代順に記述するとともに、調査終了後の整理作業において新たな発見があった遺跡についても、その成果を記述します。また、考古学に関連する事柄についてもまとめておきたいと思います。

表記にあたり、調査機関名については略称を使用させていただきます。

### 【旧石器時代】

1 宇治市乙方遺跡<sup>おちかた</sup>では、今から約13,000年前のチャート製有舌尖頭器<sup>ゆうぜつせんとうき</sup>が出土しました。(宇治市歴史資料館：4月)

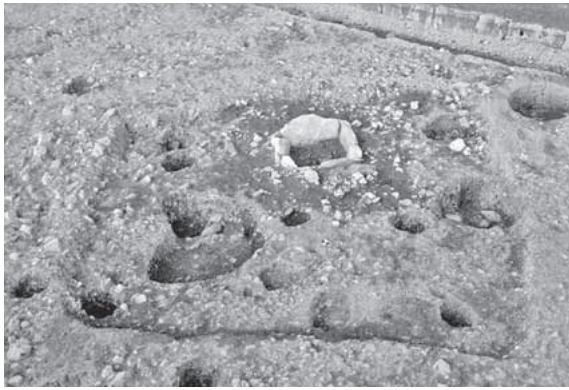
### 【縄文時代】

2 平成19年度に発掘調査を行った京都市西京区上里遺跡<sup>かみさと</sup>の整理作業において、縄文時代晩期の層から米三粒や豆数十粒がドングリなどに混じって出土しました。放射性炭素年代測定法により弥生時代前期(紀元前510～390年)との測定結果が出されましたが、測定誤差などを考え合わせますと、京都でも縄文時代晩期に稲作が行われていた可能性ができました。(京都市埋文研：6月)

3 長岡京市伊賀寺遺跡<sup>いがじ</sup>では、縄文時代後期に縄文人10人以上を火葬した墓が確認されまし



3. 長岡京市伊賀寺遺跡の縄文時代火葬墓  
墓穴の中央で口の一部を打ち欠いた縄文土器が出土



3. 長岡京市伊賀寺遺跡の縄文時代竪穴式住居跡  
四方を石で囲んだ一辺1mの炉跡  
隣接する友岡遺跡でも同時期の遺構が確認されており、周辺一帯が大規模な縄文時代の遺跡であることがわかりました。(当センター：9月)

4. 長岡京市南栗ヶ塚遺跡では、木津川市例幣遺跡に次いで府南部2例目となる縄文時代前期の竪穴式住居跡が確認され、土器や石鏃などが多量に出土しました。(長岡京市センター：11月)

5. 向日市石田・鶏冠井遺跡では、縄文時代後期の石器の未製品や土器などが埋められた穴が確認されました。石器は、奈良県と大阪府の境にある二上山で産出するサヌカイト製で、地域間の交流や石器製作を復元するうえで注目される事例となりました。(向日市センター：3月)

### 【弥生時代】

6. 亀岡市余部遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓や竪穴式住居跡が確認され、平野部に所在する大規模な集落であることがわかりました。(亀岡市教委：7月)

7. 木津川市木津城山遺跡では、弥生時代後期の14基の埋葬施設をもつ台状墓3基を確認しました。南山城地域で尾根上に築かれた台状墓としては、数少ない事例となりました。(当センター：10月)

また、その後の発掘調査では、集落の北端を区画する目的で掘られた大規模な溝が、50mにわたって確認され、弥生時代の戦いを有利にするための高地性集落の一端が明らかになりました。

また、室町時代の木津城跡に関する堀も確認されており、この地が戦略上、重要な土地であったことを物語っています。(当センター：2月)



8. 与謝野町温江遺跡の弥生土器に付された顔  
豊穰を祈念するかのような穏やかな弥生人

8. 京都府北部の与謝郡与謝野町温江遺跡では、弥生時代前期の集落を囲むと考えられる環濠を確認するとともに、弥生人を表現した人面付き土器が出土しました。当時の風俗を知るうえで、貴重な事例となりました。(当センター：2月)



## 【古墳時代】

9 亀岡市<sup>あまるべ</sup>余部遺跡では古墳時代中・後期の方墳や竪穴式住居跡を確認しました。方墳は弥生時代の方形周溝墓の系譜をひく墳墓であることから在地有力者の<sup>おくつき</sup>奥津城と考えられます。(亀岡市教委：7月)

10 乙訓郡大山崎町<sup>まつだ</sup>松田遺跡では、古墳時代後期の大規模な集落跡が確認されました。隣接する<sup>しもうえのみなみ</sup>下植野南遺跡と一連の集落跡であった可能性も指摘されており、乙訓地域でも最大規模の集落跡と考えられます。(大山崎町教委：8月)

11 八幡市<sup>みのやまおうつか</sup>美濃山王塚古墳は、古墳時代中期に築造された円墳と考えられてきましたが、後円部と前方部のくびれ部を示すように埴輪列や葺石が出土しました。周辺の地形から全長75m以上の前方後円墳である可能性ができました。王塚古墳が所在する<sup>おとこやま</sup>男山丘陵の古墳群は、木津川対岸に所在する<sup>くつかわ</sup>城陽市久津川古墳群に対抗する勢力が存在したことを示しています。(八幡市教委：12月)

12 京丹後市<sup>あみのちようしやま</sup>網野銚子山古墳では、埴輪列や葺石が確認されました。特に、墳丘の海岸側の周濠はなく、海浜部から墳丘をくっきり際立たせる様に築造されていました。また、網野銚子山古墳の陪塚である<sup>こちようし</sup>小銚子古墳との間の調査では、同一丘陵を切り離して築造されたことが判明し、計画的に両古墳が築造されたことがわかりました。(京丹後市教委：1月)

13 国内において最も古い前方後方墳である向日市<sup>もといなり</sup>元稻荷古墳では、拳大の礫によって墳丘の外面が覆われていたことがわかりました。出現期の古墳の墳丘がどのようになっていたのかを知る手がかりとなりそうです。(向日市センター：2月)

14 5世紀初頭の古墳時代中期に築造された相楽郡<sup>くらおかやま</sup>精華町鞍岡山2号墳は、直径約30mの円墳であり、同じ墓穴に同時に埋葬された木棺を2基確認しました。武器類を有する東棺と玉や鏡を有する西棺は、それぞれの副葬品の種別から男女と考えられます。当時の葬送のあり方を考える上で、重要な発掘調査となりました。(当センター：2月)



14. 精華町鞍岡山2号墳主体部  
一基の墓穴から同時に埋葬された棺の跡

15 福知山市<sup>むかひの</sup>向野古墳群では、中期末から後期初頭の木棺を直接埋葬する円墳群が調査されました。横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が形成される以前の墓制を考えるうえで重要です。(福知山市教委：2月)

16 古墳時代中期に築造された長岡京市<sup>いげのやま</sup>恵解山古墳では、後円部において埴輪列を確認するとともに、前方部と後円部のくびれ部の東側には、何らかの宗教的儀礼を行ったと考えられる祭壇状の遺構も見つかりました。公園整備をすすめるうえでの基本データが得られました。(長岡京市センター：3月)

【飛鳥時代】

17 飛鳥時代に創建された木津川市高麗寺跡では、南辺の築地塀を確認するとともに、伽藍が整備された頃から鎌倉時代初頭に廃絶する頃までに機能していた境内内の排水溝も確認されました。平成21年度から4か年計画で公園整備を木津川市が実施することになっています。(木津川市教委：2月)

【奈良時代】

18 八幡市女郎花遺跡で、奈良時代から平安時代前期の大規模な掘立柱建物跡が確認され、この地に勢力基盤をおく有力者の存在が想定されます。(八幡市教委：7月)

19 平成20年度、全国的に最も注目された遺跡の一つである木津川市馬場南遺跡では、奈良時代の万葉歌が記された木簡が出土しました。木簡には「阿支波支乃多波毛美智・・」と記されており、「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも」の一節と考えられます。また、「神雄寺」と記された墨書土器や三彩陶器製の仏像台座の一部、そ



19. 木津川市馬場南遺跡  
万葉歌木簡



19. 木津川市馬場南遺跡灯明皿出土状況



21. 木津川市鹿背山瓦窯跡

して、8,000枚もの灯明皿が建物跡の周囲に掘られた溝からまとまって出土しました。歌会などが行われた可能性が指摘されました。(当センター：10月)

その後の木津川市教育委員会の調査で東西5m、南北4.5mの礎石立ち建物跡が確認され、本堂跡ではないかと考えられています。この本堂跡からは、等身大に復元できる四天王の塑像片が出土しており、今後、出土遺物の整理がすすめば、さらに、面白い事実が判明すると考えられます。文献には残らない幻の寺院として興味は尽きません。8世紀中葉に活躍した橘諸兄と関係が深い寺院ではないかとも指摘されています。なお、1月17日に合同で実施した現地説明会では、1,300人の歴史ファンで賑わい、あらためて、馬場南遺跡の重要性がクローズアップされました。(木津川市教委・当センター：1月)

20 木津川市恭仁宮跡では、初めて朝堂院跡の一部と思われる柱穴が確認されました。(府

教委：11月)

21 木津川市<sup>かせやまがよう</sup>鹿背山瓦窯跡では、奈良時代中期の瓦窯跡を2基確認するとともに、粘土採掘する穴や瓦を製作する作業場をつなぐ2条の通路跡も確認されました。窯は、<sup>のぼ</sup>登り窯を改修して<sup>ひらがま</sup>平窯に作り替えていました。また、2条の通路は、地面を溝状に掘り、一輪車の車輪が埋没しないように砂利が敷かれ、度重なる行き来のため、一輪車の<sup>わだち</sup>轆が残っていました。ここで焼かれた瓦の文様は、平城宮の北方での出土例が知られています。(当センター：12月)

22 <sup>たちばなのもろえ</sup>橘諸兄が創建した<sup>いででら</sup>井手町井手寺跡において寺域の西限を示す溝を確認しました。徐々に、寺院の構造が明らかになりつつあります。(井手町教委：12月)

### 【長岡京期】

23 長岡宮跡朝堂院の<sup>西第四堂</sup>の南側において、石敷と階段跡が確認されました。階段の位置が対称の位置にないなど、構造の変遷を考える上で重要な調査となりました。(向日市センター：7月)

24 長岡京跡の最北端に位置する<sup>きたきょうごくおおじ</sup>北京極大路のさらに北方で、東二坊坊間西小路を延長して敷設されていることが確認されました。京域がさらに北方に延伸されていた可能性があるとともに、中国の都城制にならって、天皇の生活空間が広がっている可能性もでてきました。(向日市センター：8月)

25 長岡京市<sup>いのうち</sup>井ノ内遺跡では、長岡京跡に関する<sup>にしさんぼうおおじ</sup>西三坊大路の側溝を確認しました。(当センター：10月)

### 【平安時代】

26 京都市下京区中央卸売市場において、平安時代前期の大型掘立柱建物跡が確認されました。<sup>すざくおおじ</sup>朱雀大路沿いは、離宮や外国使節を接待するための<sup>こうろかん</sup>鴻廬館などが配置されており、邸宅か役所に関する施設があったのではと注目されました。(京都市埋文研：7月)

27 南丹市<sup>むろはし</sup>室橋遺跡では、弥生時代から平安時代の<sup>かんがい</sup>灌漑用の溝を複数確認しました。特に、昨年まで使用されていた<sup>しんじょうようすい</sup>新庄用水の下層では、平安時代後期の溝が確認されており、現在に至るまで連綿と同じ位置で用水が利用され続けたことが明らかになりました。新庄用水は、京都市右京区に所在する<sup>じんごじ</sup>神護寺再興に貢献したとされる<sup>もんがくしやうにん</sup>文覚上人が開削したと伝えられています。周辺にある<sup>もんがくいけ</sup>文覚池同様、周辺一帯における土地利用のあり方を考える上で重要な調査となりました。(当センター：2月)



27. 南丹市室橋遺跡の大溝調査風景

28 京都市西京区に所在する松尾大社から600m西方の松尾山古墳群の測量調査を実施し





31. 南丹市新庄遺跡の掘立柱建物跡  
集落の中での特別な建物か？



33. 八幡市木津川河床遺跡の調査地  
石清水八幡宮に近い木津川の川岸での調査

ていた立命館大学考古学研究会が、平安時代前期の軒平瓦や緑釉陶器などを採集しました。それまでは寺院跡としては把握されておらず、平安京を取り囲むように配置された山岳寺院の一つと考えられています。(立命館大学考古学研究会：2月)

#### 【鎌倉時代】

29 京都市左京区吉田泉殿遺跡<sup>よしだいずみどの</sup>では、石畳や諸施設の地盤を強化するための地業<sup>ちぎょう</sup>が確認されました。ここは、藤原定家『明月記』に記載された鎌倉時代の公家である西園寺公経<sup>さいおんじきんつね</sup>の別邸「吉田泉殿」跡の可能性が指摘されており、その一部ではないかと考えられます。(京大：4月)

30 京都市下京区近鉄京都駅の線路増設に伴う発掘調査で、鎌倉時代前期の水がめの口の部分を転用した「泉」の跡が確認されました。貴族の邸宅跡の一部と考えられます。(京都市埋文研：8月)

31 南丹市新庄遺跡<sup>しんじょう</sup>では、鎌倉時代末期に何らかの宗教的祭事が行われたと考えられる掘立柱建物跡がみつかりました。また、中央の柱跡からは、地鎮<sup>ちちん</sup>のために埋納された中国製青磁なども出土しました。(当センター：8月)

32 福知山市戸田遺跡<sup>とだ</sup>では、鎌倉時代から江戸時代にかけての集落跡を検出しました。一帯は、松尾大社の社領であることから、松尾大社文書に記載された「富田」集落の一部と考えられます。(当センター：9月)

33 八幡市石清水八幡宮<sup>いわしみずはちまんぐう</sup>の近くに位置する木津川河床遺跡<sup>きつがわかしょう</sup>では、鎌倉時代後期の整地層から、中国製の青磁や白磁などが出土しました。また、昨年度の発掘調査でも、平安時代の高価な緑釉陶器などの器が出土しており、物流が盛んであった石清水八幡宮の門前町<sup>もんぜんまち</sup>の北端である可能性がでてきました。木津川は、明治2年の改修以前は、現在よりも2km東側を流れており、現在の川の流れで流出することなく、遺跡が残っていました。(当センター：2月)

#### 【室町時代】

34 京都市下京区童侍者町<sup>どうじしやまち</sup>(平安京跡左京五条三坊九町)では、66基の甕が埋設された多数の穴<sup>こうじ</sup>や麴作りの地下倉庫も確認されました。下京の経済を支えた酒屋の跡と考えられます。(京都市埋文研：8月)

### 【安土桃山時代】

35 昨年度、発掘調査が行われた京都市下京区旧本能寺跡<sup>ほんのうじ</sup>の出土遺物整理で、密教<sup>みっきょう</sup>で使われる呪文<sup>じゅもん</sup>、光明真言<sup>こうみょうしんごん</sup>の一部と考えられる「・・遮那摩訶母那羅摩尼□摩・・」の一文が卒塔婆<sup>そとば</sup>に書かれていることが判明しました。本能寺の変での多数の死者を供養した可能性が指摘されました。(関西文化財調査会：6月)

36 豊臣秀吉は、奈良東大寺<sup>りやうが</sup>を凌駕する大仏を安置するため、方広寺<sup>ほうこうじ</sup>(現在の京都国立博物館の位置)を創建しました。発掘調査によって55,000㎡におよぶ盛り土で整地していることがわかりました。10 tトラックで換算しますと10,000台分に相当し、大規模な事業であったことを裏付けました。(京都市埋文研：3月)

### 【江戸時代】

37 京都市左京区下鴨神社<sup>しもがもじんじや</sup>では、井戸の底面に桶などをもたず、また、井戸の底面が湧水層まで達していない井戸跡を確認しました。同神社の1799年の文書に雨乞い<sup>あまご</sup>の際、井戸を掘削したとの記事があり、また、絵図にも「雨壺」が存在したことが記載されており、関連が注目されています。(下鴨神社：4月)

38 宇治市に所在する萬福寺<sup>まんぶくじ</sup>の本堂である大雄宝殿<sup>だいおうほうでん</sup>の南方200mの地点で、江戸時代前期に存在した塔頭<sup>たっちゅう</sup>である華蔵院跡<sup>けぞういん</sup>が確認されました。改めて萬福寺が大規模であったことを知らしめる調査成果となりました。(宇治市資料館：8月)

### 【明治時代以降】

39 漏斗<sup>ろうと</sup>や乳鉢などの化学実験などに使用される陶磁器を製造していた京都市道仙化学製陶所跡が調査され、清水焼に使用される窯道具なども確認されました。清水焼の技術的な影響があったことが、初めてわかりました。(立命館大学：10月)

### 【発掘調査とその周辺】

40 平安京造営に瓦を供給した大山崎町に所在する国史跡大山崎瓦窯跡<sup>おおやまざきがよう</sup>では、その重要性を広く後世に伝えるために説明版が設置され、秋の試掘調査では、瓦窯がさらに北に延びることが明らかになりました。(大山崎町教委：4月)

41 「古代学」を提唱し、平安博物館を創設、海外の発掘調査に早くから着手された角田文衛<sup>つのだぶんえい</sup>氏が5月14日、95歳で逝去されました。その偉業は広く知られており、訃報が大きく報じられました。

42 大山崎町円明寺に所在する大山崎中学校建設予定地で、親子6組が体験発掘を楽しみました。郷土愛を培う意味でも、体験発掘は楽しい経験になったようです。向日市では毎年修学旅行生の発掘体験を受け入れています。(大山崎町教委：5月)

43 南丹市新庄遺跡では新庄小学校6年生が、竪穴式住居跡などで発掘調査を体験しました。

また、石器を作ったり考古学の話を知ったりと貴重な体験をしました。(当センター：6月)

44 京都市伏見水垂取蔵庫が開設され、1989年の金閣寺で出土した巨石などを運搬する修羅などが公開されています。(問い合わせ：京都市文化財保護課075-761-7799)

45 当センター主催の「第24回小さな展覧会」と「絵でみる考古学展 -早川和子原画展-」が、向日市文化資料館で開催され、考古学ファンで連日賑わいました。

46 国史跡である天皇の杜古墳を定期的に巡回、清掃し、その重要性を後世に伝えようと松陽学区の史跡天皇の杜古墳保存会が、15年目をむかえました。

47 近畿地方で発掘調査を行う11機関が、考古学をさらに身近な存在になるように「関西・考古学の日」を設定し、多くのイベントを9月から11月の間実施し、好評を博しました。

48 向日市埋蔵文化財センターが設立20周年記念展「遺跡発掘二十年 足もとにある宝もの」を開催しました。また、乙訓の遺跡をわかりやすく解説した『向日市の遺跡』を刊行しました。

49 龍谷大学では、博物館実習を受講する47名の学生が、「あそび」をテーマに実際の展示に係る貴重な体験をしました。

50 木簡学会では、今年度出土した木津川市馬場南遺跡の万葉歌木簡や明日香村石神遺跡の木簡についての質疑が行われ、あらためて、その重要性が再認識されました。

51 宮内庁管轄の桃山陵墓地に日本考古学協会などの立ち入り調査が行われました。伏見城研究をすすめるうえでも、基本となる立ち入り調査となりました。

52 天明8(1788)年に京の都を焼き尽くした天明の大火の被災状況を克明に伝えた瓦版が、瓦版収集家によって古書店から発見されました。この大火によって生じた焼土層は、京都市内の発掘調査でしばしば確認されており、今後、被災範囲をさらに詳しく検証する好材料として研究が待たれます。

## おわりに

近年、全国的な発掘調査件数は減少傾向にあり、京都府内においても同じ傾向にあります。しかし、以上みてきましたように考古学上、非常に重要な一年であったといえます。

今後は、これらの膨大な資料をいかに日本史の中に溶け込ませることができるかが、われわれに与えられた大切な業務となります。本稿が、その礎の一部になればと切に願っています。

(こいけ・ひろし 当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長)



## むろはし 16.室橋遺跡第17次

所在地 南丹市八木町室橋

調査期間 平成20年12月3日～平成21年2月25日

調査面積 1,200㎡

はじめに 室橋遺跡は、亀岡盆地の北端に位置し、南北約800m、東西約300mにわたって広がる複合集落遺跡である。平成10年度からの過去16次におよぶ調査によって、弥生時代中期から中世にかけての数多くの遺構や遺物が検出された。なかでも灌漑用水とみられる溝群は遺跡の各所で確認され、古代における大規模な開発が注目される遺跡である。調査は、府道亀岡園部道路改良工事に伴い実施した。

**調査の概要** 今回の調査では、計画路線上の4か所(1～4区)で調査を実施した。

1区は、遺跡の南部に設定した調査区である。幅約1.3mの古墳時代と推定される溝1条、幅約1mの奈良時代と推定される溝1条と柱列を検出した。溝は北西から南東へ流れ、いずれも昨年度調査した南側隣接地から30m以上にわたって続く溝であることが判明した。

2区は、遺跡のほぼ中央に位置する調査区である。古墳時代中期から平安時代にかけての溝や竪穴式住居跡を検出した。中央部で検出した幅約2.5mの古墳時代中期前半の溝(S D17202)からは、土師器がまとまって出土した。古墳時代後期にこの溝は埋まり、竈付きの竪穴式住居跡1棟(S H17205)が構築されていることが判明した。調査区西寄りでは、奈良時代末～平安時代前期の灌漑用水と推定される溝(S D17204)を、30m以上にわたって検出した。また調査区南端の溝(S D17203)は、最近まで室橋地区の灌漑用水として活用されていた旧新庄用水の下層で検出したもので、おおよそ11世紀～12世紀の溝と推定される。

3区は、遺跡の中央北寄りに位置する調査区である。北西から南東へ掘削された溝(S D17301)1条を検出した。幅3.3m、深さ1.5mを測り、断面形は台形状をなす。この溝の北西側延長部は、15次調査でも検出されている。埋土



第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/50,000 京都西北部)



第2図 2区溝SD17203全景(南から)



第3図 3区溝SD17301全景(南東から)



第4図 4区溝SD17401全景(南東から)

には、細かな砂礫を多量に含むことから流路と推定され、灌漑用水として機能した溝と考えられる。出土遺物から、奈良時代後期～平安時代前期の溝であることが判明した。

4区は遺跡の北端にあたり、北西から南東方向へ向かって掘削された大規模な溝(SD17401)を検出した。溝幅約5～6m、深さ約2.3mを測り、溝の断面形は逆台形状をなす。埋土は、シルトと砂礫層の互層をなす。最下層の黒色粘質土層からは、自然木を含む植物遺体が多く出土した。出土土器は、土師器細片等を含むが極めて乏しく、今回の調査では年代確定のための十分な資料が得られていない。南東延長部を調査した過去の発掘では、中～下層でわずかながら弥生時代後期～古墳時代初頭の土器片が出土している。

まとめ 今回の調査では、各地区で溝群を検出した。なかでも4区の溝は、丹波地域では最大級の規模をもつ大規模な溝である。弥生時代後期～古墳時代初頭の可能性があるが、出土遺物は少なく、詳細な時期の検討は今後の課題である。また、2区では古墳時代中期～後期にかけての溝や竪穴式住居跡を検出し、遺跡北部における古墳時代集落の広がりを確認した。さらに、平安時代後期～末期の灌漑用水と考えられる溝の一部を、新庄用水の下層で検出した。今日まで活用されている新庄用水は、文治4(1188)年に高雄神護寺の高僧文覚が開削したとする伝承を残しており、今回の調査による平安時代の溝群の検出は、当地域の荘園開発や歴史の変遷を明らかにする資料として注目される。(高野陽子)

## 17.長岡京跡右京第952次・井ノ内遺跡<sup>いのうち</sup>

所在地 長岡京市井ノ内横ヶ端、今里五丁目

調査期間 平成20年9月24日～平成21年1月29日

調査面積 680㎡

はじめに 今回の調査は、平成20年度主要地方道大山崎大枝線地方道路整備事業に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

調査地は西山丘陵裾から東側に延びる標高40m前後の低位段丘上に位置する。長岡京の条坊復元では、右京三条三坊十五町・三条四坊二町、西三坊大路が想定される。また、縄文時代から中世にかけての井ノ内遺跡、一部今里遺跡と重複する地点である。

今回の調査は、現道路沿いに1～5トレンチを設定し、上記の遺跡に係わる遺構・遺物等の資料を得るために実施した。

調査概要 調査の結果、長岡京期の西三坊大路西側溝、側溝の西側に面する宅地内溝、古墳時代の竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡・井戸、弥生時代の大溝等とこれに伴う多くの遺物が検出された。なお、5トレンチでは遺構・遺物は皆無であった。

1トレンチでは、長岡京跡の西三坊大路西側溝 S D01を検出した(第2図)。ほぼ真南北方向を示し、幅1.2m、深さ0.25mを測る。断面は皿状を呈し、細かな砂礫と泥土が堆積する。溝底には、偶蹄動物(牛?)の足跡が見つかった。遺物は長岡京期の土師器皿が出土した。

宅地内溝 S D02は、西三坊大路西側溝 S D01の西側約3mで真南北方向に平行しており、幅2.2m、深さ0.3mを測る。断面は浅い皿状を呈し、砂礫と泥土が堆積し、溝底には西三坊大路西



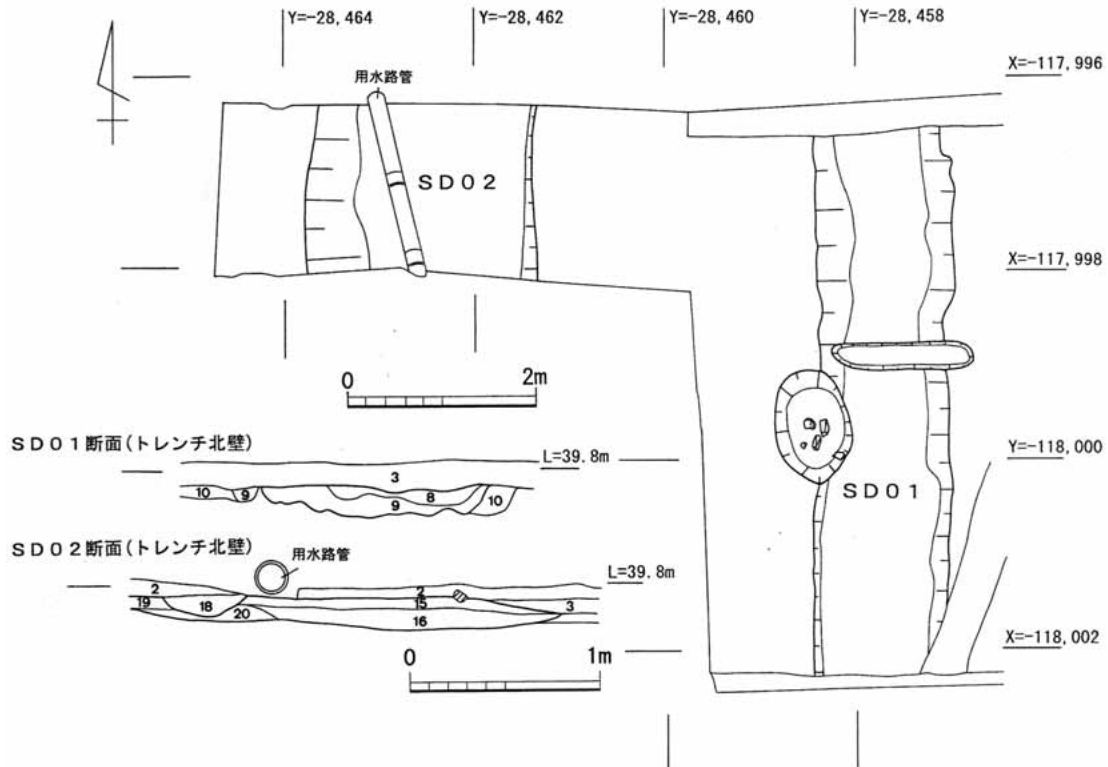
第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

側溝 S D01と同じような偶蹄動物の足跡があった。遺物は細片であるが土師器・須恵器等が多数出土した。

この両溝は、土層・遺物・足跡の痕跡・底面の標高等、類似点が多く認められることから、同時に並存していたものと思われる。従って、両溝3mの間隔は築地塀、犬走り等を構成する基(壇)部に相当するものと推察される。

2トレンチでは、奈良時代の掘立柱建物跡7棟以上を検出した。これらのうち2棟は、柱筋が真南北方向からやや東に振れる南北2間、東西5間以上の大型建物跡である。大型建物に重複して、柱穴は小さいが、2棟以上の建物跡が





第2図 1 トレンチ西三坊大路西側溝SD01・宅地内溝SD02平面・断面図

検出された。2間×2間の総柱建物跡3棟は真南北方向から東に大きく振れる倉である。これらの建物跡は奈良時代を通じて頻繁に建て替えが行われたことが推察される。

古墳時代後期(6世紀代)の竪穴式住居跡4基以上を検出した。竪穴式住居跡は一辺4～5mの方形を呈し、住居内には北辺(側)に竈の残骸があり、その周辺から煮炊き用の土師器甑や甕、須恵器高杯・杯蓋等の食器類が出土した。

3・4トレンチでは、弥生時代後期の溝を確認した。幅3m、深さ1mを測る。断面は逆台形を呈し、溝内から甕・鉢・壺・高杯など弥生土器が多量に出土した。溝は近隣の調査を総合すると、集落の周囲を巡る「環濠」と想定される。

まとめ 本調査地の北側約600mの右京第775次(平成15年度京都市埋文研調査)では西三坊大路西側溝SD10、宅地内溝SD11・12が検出されており、今回検出した溝SD01・02はそれらの延長上に位置する。西三坊大路の路面幅については、右京第83次調査の溝SD15を東側溝とすれば、24m(8丈)である可能性がでてきた。今回検出した築地塀の基(壇)部の幅3mは、築地の規模としては最小の「垣」であるが、この垣の存在から、西三坊大路に隣接する三条四坊二町の宅地利用がかなり進んでいたものと考えられる。

1～4トレンチの掘立柱建物跡群、複数回の建て替えが認められる竪穴式住居跡、溝の検出などは、弥生時代から奈良時代にかけての井ノ内遺跡の集落の変遷や南側に隣接する今里遺跡の集落との関連などを知る上で貴重な資料である。

(竹井治雄)

## 18. 長岡京跡右京第957次・<sup>しもかいんじ</sup>下海印寺遺跡

所在地 長岡京市下海印寺尾流

調査期間 平成20年11月26日～平成21年2月26日

調査面積 820 m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、京都第二外環状道路の建設に先立ち実施した。調査地は、近年の長岡京跡の条坊復元によると、右京七条四坊および西四坊大路に想定される。また、縄文時代から中世にいたる集落遺跡として知られている下海印寺遺跡の範囲にも含まれている。

調査は、小泉川に面する河岸段丘上及び一段低い水田部で実施し、縄文時代から近世に至る時期の遺構・遺物を検出した。

調査概要 縄文時代の遺構としては、調査地の南端部で縄文土器片を含む暗褐色の砂質土層が部分的に認められ、後期の土坑4基(SK80・97・105・107)と晩期の土坑1基(SK106)を検出した。

弥生時代末～古墳時代の遺構は、竪穴式住居跡1基(SH58)、土坑1基(SK54)を検出した。竪穴式住居跡は、南半を小泉川の氾濫によって削られている。弥生時代終わり頃のもので、一辺の長さ約5mの方形の住居と考えられる。床面からは、炭化した木材片、赤く焼けた土器や土の塊が出土した。火災にあった住居と考えられる。土坑(SK54)内からは、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器等が出土した。

奈良時代のものとしては、掘立柱建物跡2棟(SB06・60)、土坑1基(SK05)を検出した。これらの遺構はそれぞれの辺が並行していることから、同じ時期のものと考えられる。その方位は真



第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

北から約10度西に傾いている。土坑SK05の中には拳大の円礫が全面に敷き詰められていた。

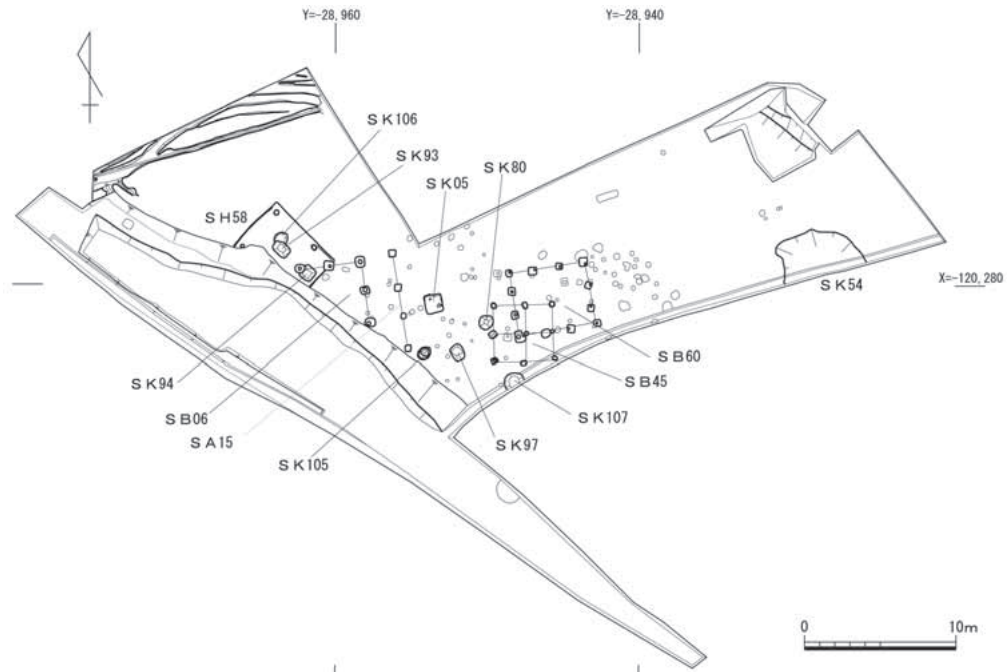
さらに、掘立柱建物跡SB60に重複して2間×2間の総柱建物跡SB45を検出した。その方位は真北から約3度西に傾いている。掘立柱建物跡SB60との先後関係を含めて、時期は不明である。

近世の遺構には、調査地の北寄りで耕作に伴う溝・暗渠を検出した。北側の道路に並行しており、現在の水田地割りができる前の用排水路と考えられる。

まとめ 今回の調査では、縄文時代、弥生時代、奈良時代と各時代の遺構や遺物を確認する

ことができた。なかでも、弥生時代の住居跡や、奈良時代の建物跡の存在は、それぞれの時代の集落の広がりを考える上で、大きな手がかりと言える。

(戸原和人)



第2図 遺構配置図



第3図 掘立柱建物跡SB60(北から)



第4図 竪穴式住居跡SH58(北東から)



## 19.長岡京跡右京第963次・<sup>まつだ</sup>松田遺跡

所在地 乙訓郡大山崎町円明寺小字一丁田

調査期間 平成21年1月26日～3月10日

調査面積 200㎡

はじめに 調査対象地は、長岡京の新条坊復原では京外となるが、旧条坊復原では右京九条二坊十三町にあたり、古墳時代の集落跡である松田遺跡の範囲に含まれる場所である。松田遺跡の中心地域である大山崎中学校内の右京第933次調査では、古墳時代の竪穴式住居跡10棟、古墳時代から飛鳥時代の掘立柱建物跡4棟などが検出されている。また、調査地は下植野南遺跡に隣接し、名神高速道路の拡幅工事に伴う右京第357・367・368次調査等で、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が50棟以上検出されている。この調査は京都縦貫自動車道新設改良工事に伴う調査である。

**調査概要** 調査は、小泉川の堆積土約2m、後世の盛土約3mが堆積しており、調査地の地表面が標高18m前後、竪穴式住居跡の検出面が標高約12m前後で、地表面から遺構検出面までの深度約6mである。

小泉川氾濫原の礫層の下には青灰色系の粘質土が1m～0.5m堆積し、その下で暗青灰・暗青褐色粘質土の遺物包含層を確認した。北半部では、遺物包含層の下で暗青褐色土の窪みと浅い小土坑1基を検出した。基本層序は遺物包含層の下が青灰色・淡灰色の粘質土で、前記以外の遺構は検出しなかった。

南半部では、青褐色～褐色土の遺物包含層の下で、古墳時代後期の竪穴式住居跡2基(SH



調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 淀)

01・02)を検出した。竪穴式住居跡SH01は一边が約6.5mを測る方形の住居跡で、埋土上面から5世紀後半の須恵器高杯が出土した。南西部の竪穴式住居跡SH02からは、6世紀前半の須恵器の杯蓋が出土した。今回検出した遺構については、次年度以降に、詳細な調査が予定されている。

まとめ 今回の調査で、長岡京期の遺構は検出しなかったが、古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出した。2基の竪穴式住居跡は同一方向を向き、松田遺跡の古墳時代集落の一部と推定される。(石尾政信)

## おんなだに あらさか 20.女谷・荒坂横穴群

所在地 八幡市美濃山荒坂

調査期間 平成21年1月28日～2月26日

調査面積 250㎡

はじめに 女谷・荒坂横穴群は、八幡市南端部の美濃山荒坂に位置し、丘陵斜面や谷筋斜面に古墳時代後期の横穴が広く分布している。これまで、平成4・11～14年度に調査を実施している。今回の調査は、道路建設に伴う工事対象地内に横穴等の有無を確認するために実施した。

調査対象地は遺跡範囲の北西端部の谷筋に位置し、調査対象地内の南に傾斜する斜面にトレンチを設定し、調査を実施した。

調査概要 調査は、現存する竹の伐採をした後、現地表面から重機による掘削を進め、約1.2mの深さで安定地層(地山面)を確認した。その後、人力により、遺構・遺物の検出作業を行った。その結果、調査トレンチ南西部の南斜面において、暗茶褐色の溝状の土色変化を2か所で検出し、その形状から横穴であると判断した。うち1基では、玄室の天井部と推測される位置に陥没痕と思われる溝状の土色変化も確認した。検出した2基の横穴は、同一方向を向き南南西に開口しているが、羨道の掘り込まれている高さが異なっていた。

まとめ 今回の調査で2基の横穴を確認し、この谷筋がさらに西側や北東側に続いていることが明らかになった。また、平面的な土色の観察ではあるが、横穴の存在を確認し、さらに横穴が分布し、この谷筋に新たな支群が存在することが予想される。

なお、今回の調査はこの地区に横穴が存在するかどうかを確認するための調査であり、検出した横穴の時期や内部構造については、次年度以降の調査成果に期待したい。

(村田和弘)



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 淀)



第2図 横穴検出状況(南から)

## きづしろやま きづじょう 21. 木津城山遺跡第 6 次・木津城跡

所在地 木津川市大字木津小字片山

調査期間 平成20年 5 月 1 日～平成21年 2 月26日

調査面積 4,000㎡

はじめに 今回の発掘調査は、関西文化学術研究都市の整備事業に伴って実施した。木津城山遺跡は、平成 9～13 年度にかけて発掘調査を実施しており、弥生時代後期前半の竪穴式住居跡や段状遺構などを多数検出し、高地性集落であることがわかっている。木津城跡は丘陵最高所に方形単郭の城郭遺構が明確に遺存しており、すでに緑地保存が決定している。

今回は、A・B-1・B-2・C 地区の 4 地区について調査を実施したが、このうち、A・B-1 地区は木津城山遺跡、B-2・C 地区は木津城跡に該当する。

調査概要 今回の調査では、木津城山遺跡に伴う竪穴式住居跡や大溝・墳墓などと、木津城跡に伴う堀を検出した。

A 地区では、竪穴式住居跡 6 基、土坑 1 基、段状遺構 3 基と、これらを囲む大溝 1 条を検出した。竪穴式住居跡はいずれも、標高 96m よりも高いところに分布する。竪穴式住居跡 2 の排水溝からは銅鏃が 1 点出土した。また、住居跡や段状遺構の平坦面からは弥生土器が多数出土した。大溝は、竪穴式住居跡や段状遺構などを取り囲むように掘削されている。大溝は幅 3～5 m、深さは山裾側で約 50cm を測る。大溝をはじめ各遺構からは弥生土器が多数出土した。また、溝の外側(丘陵低位側)には遺構・遺物はなく、この溝が集落の境界であったことがわかる。

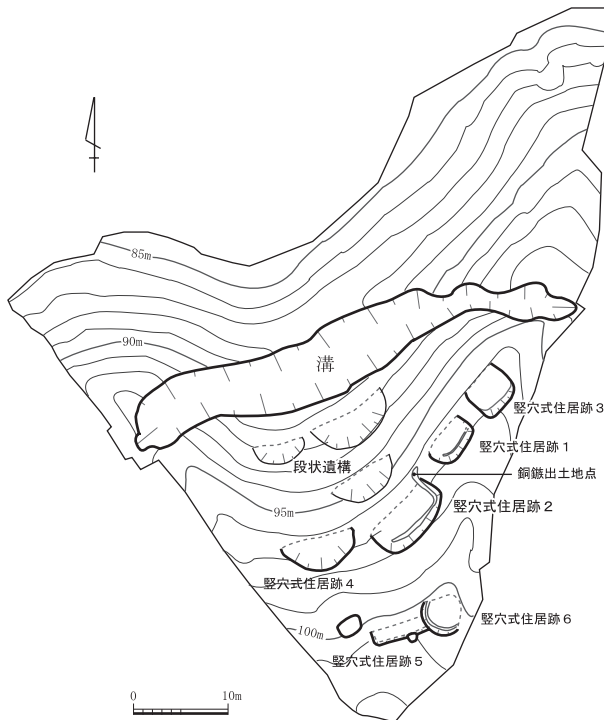
B-1 地区では、台状墓 3 基とその墳丘上で合計 14 基の埋葬施設を検出した。台状墓は、北西にのびる細長い尾根を溝で切り離して造墓されている。

1 号墓は長辺 9.4m、短辺 9.0m を測る。墳丘頂部で 3 基の埋葬施設を検出したが、副葬品等は出土しなかった。2 号墓は長辺で 23m 以上、短辺 12.0m を測る。墳丘上の埋葬施設を合計 11 基検出した。埋葬施設 S X 09 からは中国製の鏡の破片が、埋葬施設 S X 18 からは鉄鏃が出土した。なお、埋葬施設 S X 09 の中国製鏡片は平成 9 年度の試掘調査の際に出土したものである。3 号墓は長辺 11.4m、短辺 9.0m を測る。3 号墓



第 1 図 調査地位置図  
(国土地理院 1/50,000 奈良)





第2図 A地区地形測量図および検出遺構配置図

の埋葬施設はすでに削平されてしまったと考えられ、検出されなかった。

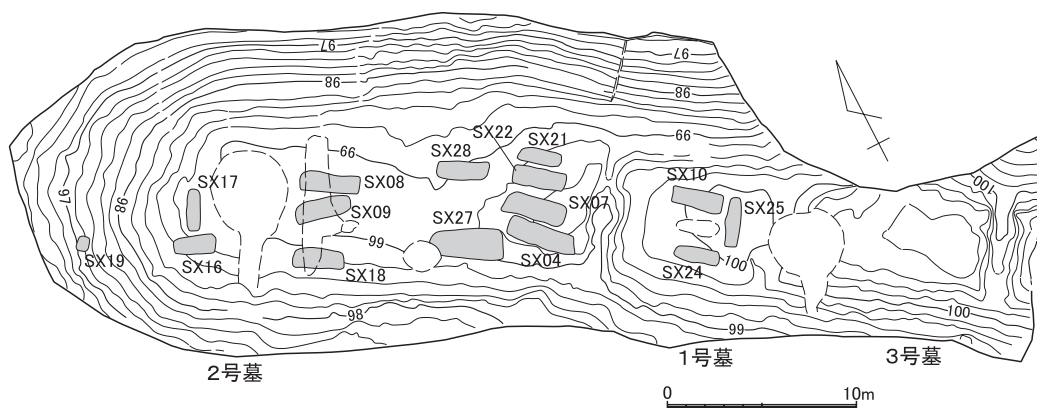
B-2・C地区は木津城跡の調査区である。木津城跡はA地点の南方にある中世の山城で、発掘調査により城の遺構を検出したのは今回がはじめてである。B-2地区で検出した堀は、最大幅約4.6m、深さ2m、断面V字形である。C地区で検出した堀は長さ20m、最大幅4m、深さ2.5mの断面逆台形である。堀の形状から、木津城跡の堀切りであったと考えられるが、いずれの堀の埋土からも遺物は出土しなかった。

まとめ 木津城山遺跡では、弥生時代後期の集落の周囲をめぐると思われる大溝や墓域を確認することができた。溝は急な

斜面をなして掘られており、集落の防御施設としても機能した可能性も考えられる。本遺跡でこのような大溝が検出されたのは初めてであり、これまでの調査成果と合わせて遺跡の性格を考えていく上で重要な成果を得ることができたといえる。

木津城跡の調査では、城跡としては今回初めて発掘調査を実施した。これまで土塁や溝状の窪みなどの遺存地割りでしか城の様相を窺うことはできなかったが、今回の調査で城の防御施設である堀を2条確認し、堅牢な城であることが明らかとなった。

(筒井崇史・松尾史子)



第3図 B-1地区地形測量図および検出遺構配置図

## 平安時代の京都

### はじめに

平城京から延暦3(784)年に長岡京に遷都がなされましたが、10年後の延暦13(794)年に、桓武天皇は都を平安京に遷しました。平安京は山背国の愛宕・葛野郡(現京都市)に置かれ、明治2(1869)年の東京奠都まで続きました。新しい都へと遷都し、当時の京都の国名も「山背国」から「山城国」に変更されました。平安京が置かれた山城北部は、まず、桂川・賀茂川(鴨川)・宇治川・木津川、さらにそれらが合流した淀川が流れており、水上交通の著しく発達した地域でした。陸上交通においても同様で、北陸道(山背道)、山陰道(丹波道)が通過していました。水陸交通の利便は、古代宮都の備えるべき必須条件で、平安京造営の原因の一つといえます。また、山城国には、その直前の都であった長岡京のほかに、継体天皇の筒城宮(511年)・弟国宮(518年)、聖武天皇の恭仁京(740年)と、平安京に先行する四宮都が置かれていました。こういった歴史的背景からも、平安京造営につながったといえます。

### 平安京はどんな都だったのか

平安京の平面形態は、唐の宮都長安をモデルとして、これに日本独自の特色が加味されて設計されました。中軸線もち左右対称であること、宮域と京域が分離されていることなどは長安城に類似していますが、南北が長いこと、大きさが3分の1以下にすぎないことなど相違する点もあります。平安京は、東西4.5km、南北5.3kmの広さで、中央北寄りには宮域(大内裏)が位置し、その東・西・南面に京域が広がっていました。中央には幅84m(28丈)の朱雀大路があり、平安京の正門ともいべき羅城門と宮域の入口の朱雀門とを結んでいました。

条坊は一条大路を北限とし、南限の九条大路間に11本の大路、東京極大路を東限として西限の西京極大路間に9本の大路、この合計20本の大路が平安京の主要道路であり、これを基準として碁盤の目のように区分され、南北を9区分(条)、東西も大路を基準に左京と右京でそれぞれ4区分ずつに分割(坊)されました。京域は左右の京職が管轄し、畿内・七道といった一般行政区画とは異なった特別区とされました。条と坊によって区分された区画を、たとえば「左京一条三坊」などというように表します。また、この坊という区画は東西南北に走る小路によってさらに16町に区分され、この1町(約120m四方)が都における宅地配給の基準になりました。宮の周辺には貴族や庶民が住み、その屋敷地は身分によって大きさが決まっていました。高級貴族は1町(約14,400㎡)以上、下級役人は16分の1、庶民は最小単位の32分の1(約450㎡)と決められていました。最小の単位は戸主で、奥行10丈・幅5丈(30m×15m)の広さでした。戸主は標準的な一戸の家族の居住地として設定されたもので、本来は平安京が宅地のみからなるものであったこと、つ

まり農地をもたない地域であったことを示しています。

平安時代中期になって平安京は変化していきます。桂川に近く低湿であった右京が衰退していきます、荒れた土地になったり、農耕地へと変わっていきました。左京に宅地が密集・発達し、さらに一条大路を越えて北野、東山極大路を越えて鴨川周辺、さらに白河街区へと新たに市街が展開し、計画された平安京本来の条坊規格が崩壊していきました。平安京は、これ以後も宮都として置かれ続けますが、左京を中心に平安京の本来の範囲より東に偏って発展していくこととなります。その後、首都としての平安京は、関東地方を基盤とする鎌倉幕府や江戸幕府の成立によって行政府としての機能を次第に失っていきましたが、明治2(1869)年の東京奠都まで続きました。

### 平安時代の遺跡(丹後国・丹波国・山城国)

政治・経済の中心地であり、交通の要所であった山城国は、水路と陸路の利便さを生かし、近隣の丹波国・丹後国や遠方の国々、国府や郡衙などの役所や国分寺・国分尼寺などの寺院、駅家や津などの重要な拠点とを結び、情報や人の交流・ものの交易が盛んにおこなわれました。

#### ①丹後の遺跡

京丹後市網野町の<sup>よこまくら</sup>横枕遺跡は、かつて日本海へとつながる入り江が、砂州の発達により隔絶され、潟湖となった<sup>はなれこ</sup>離湖の東側に位置します。出土遺物には、一般の集落からはあまり出土しない緑釉陶器や中国からの交流品などがあり、交易に関連した施設であった可能性があります。

#### ②丹波の遺跡

福知山市大内、土師川と竹田川の合流地点付近の丘陵上にある<sup>おおうちじょう</sup>大内城跡では、平安時代から室町時代の遺跡が見つかり、地方では例を見ない豊富な陶磁器類の出土とともに、<sup>やかた</sup>館(12世紀後半)から山城(15世紀)への変貌が確認され、注目された遺跡です。平氏とつながりのある六人部荘官の館跡と推定されています。

亀岡市の<sup>しの</sup>篠窯跡は、奈良・平安時代に焼物を焼いた窯が密集する地域として知られています。ここでは、須恵器や緑色の釉が施された高級な緑釉陶器、さらには屋根に葺かれる瓦類などが焼かれていました。特に平安時代には、日本を代表する焼物の産地となり、生産された須恵器や緑釉陶器は、平安京をはじめ、北は宮城県の多賀城、南は宮崎県辺りまでと、全国各地へと供給されていました。

また、亀岡市には丹波国府と推定されている<sup>ちよかわ</sup>千代川遺跡があります。丹波国府がどこに置かれていたのかはまだ確認されていませんが、候補地として、亀岡市千代川町拝田の千代川遺跡と、南丹市八木町屋賀の<sup>やが</sup>屋賀遺跡が挙げられます。亀岡市馬路町の<sup>いけじり</sup>池尻遺跡では、区画された溝の内側から大型の建物跡2棟が確認されました。一辺が0.5m~0.7mの方形の穴を掘って柱を立てた大型の掘立柱建物跡を確認しました。建物の軸線を真北に合わせていることや屋根に庇を持つこと、また規模や整然とした配置、溝で区画されていることから当時の役所であった可能性が高まりました。この役所は、現在の県庁にあたる「丹波国府」もしくは、桑田郡を管轄した「桑田郡衙」であったと考えられます。これにより、候補地である亀岡市の千代川遺跡と南丹市八木町の



屋賀遺跡とともに、異なる時代の丹波国府として、また桑田郡衙としてクローズアップされ、丹波の歴史を知る上で重要な手がかりになります。

### ③山城の遺跡

平安京の調査では、各地で数多く調査されています。平安京跡右京一条三坊九町の調査では、建物が「コ」の字に配置された建物群が見つかりました。一町域の広さを持つ平安時代前期の貴族の邸宅跡とみられます。また、貴族の邸宅跡のほかに宮内の役所などの遺構も見つかっています。平安京跡左京一条二坊の調査は、平安時代の囚獄司と左獄舎があったところで、平安時代前期の井戸などが見つかり、須恵器・土師器・黒色土器のほかに緑釉の香炉や唾壺、灰釉の壺などの高級な陶器も出土しました。

京都市では、貴族の邸宅のほかに、寺院や庭園なども造られています。そのなかで、康和4(1102)年に鴨川の東、白河に建てられた堀川天皇が発願した尊勝寺そんしょうじがあり、この寺は六勝寺のひとつで、発掘調査によって、丈六の観音像を安置した観音堂跡と推定される建物跡が見つかりました。

大山崎町の久我こがなわては、平安京の朱雀大路の延長上にある鳥羽の作り道と大山崎の津を直線的に結ぶ道路で、平安京遷都直後に計画的に造られたと考えられています。しかし発掘調査の結果では、久我こがなわてが平安京遷都直後に作られていたことは確定できていません。

今回は、当調査研究センターで調査した平安時代の代表的な遺跡についてご紹介します。

(村田和弘)



京都府の地図と紹介遺跡



京丹後市横枕遺跡出土の緑釉陶器



平安京跡左京一条二坊の調査地

## 都人の<sup>うつわ</sup>器生産

京都市内から京都縦貫自動車道に乗り、老ノ坂トンネルを越えたところに、奈良時代から平安時代まで約300年間操業した須恵器の生産遺跡、篠窯跡群があります。谷間の丘陵斜面を利用して総数百数十基の窯が点在して築られました。その範囲は、膨大な燃料消費に伴う薪の確保のためか、東西約3.5km・南北2kmにも及びます。



マル山1号窯



西長尾5・6号窯



篠窯跡群出土遺物

めか、東西約3.5km・南北2kmにも及びます。

須恵器は、5世紀初めに朝鮮半島から登り窯<sup>ろくろ</sup>や轆轤の技術が導入され、摂氏1,100度以上の高温で還元炎焼成された耐水性の高い青色の焼き物です。酸化焼成された赤色の弥生土器や土師器とは違った焼き物で、各地にまたたく間に普及しました。須恵器は古墳の副葬品としても利用されることが多く、装飾された壺や器台なども作られます。飛鳥時代になると、器種・器形に統一化がみられるようになります。

さて、篠窯跡群は、8世紀に丹波国府や国分寺に製品を供給する地方窯として築られますが、長岡京や平安京に都が遷されると、飛躍的に発展して、都人の食膳に供する一大生産地に変貌します。

10世紀中頃には一辺2m前後の三角形の小型窯が築られます。役所や寺院で使われた緑の釉薬を掛けた緑釉陶器も焼成していました。緑釉陶器や須恵器鉢などは、平安京を中心として近畿以西に広く流通していました。10世紀以降、椀・鉢を主体とした小形の製品を供給していましたが、平安京内では、輸入陶磁器といった耐水性を備えた製品や瓦器などの簡易な焼き物が出現したため、須恵器需要が激減し、篠窯跡での須恵器生産が終焉を迎えます。

京都縦貫自動車道篠インターチェンジの敷地内には、説明板の設置された位置の真下に、緑釉陶器を焼成した黒岩1号窯が保存されています。

(水谷壽克)



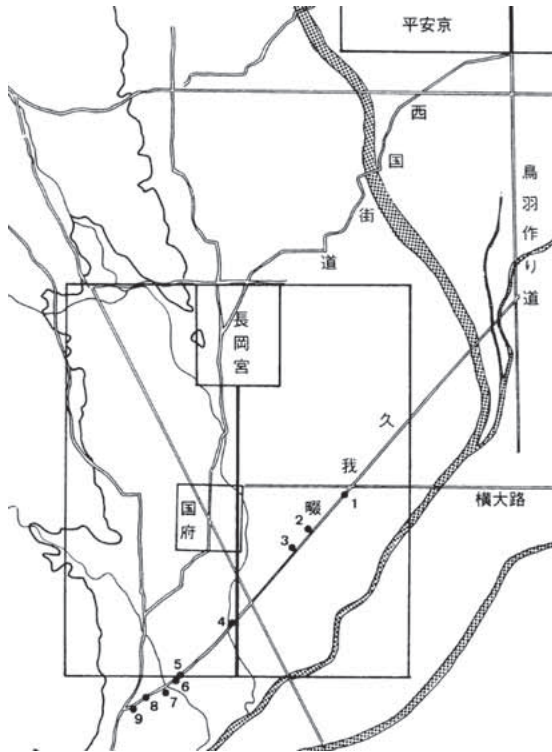
## 直線道路 こがなわて 久我暇

応仁の乱のさなか、応仁元(1467)年に久我暇において、時の有力者山名氏と細川氏が政権を争って合戦をしたのは有名な話です。また、秀吉が天下をとった大山崎の合戦でも、武士たちが久我暇のあたりで戦いを繰り広げました。

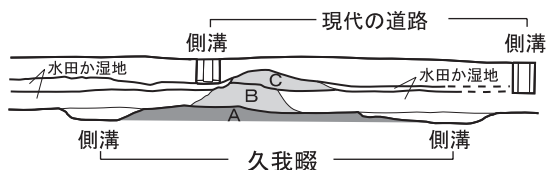
久我暇は、平安京の朱雀大路の延長線である「鳥羽作り道」から山崎駅を結ぶ北東から南西方向の直線道路で、歴史地理学では、平安京造営時に造られたと推定されています。

久我暇が文献にはじめて現れるのは『徒然草』で、鎌倉時代のことです。『太平記』などにも見られます。それらの記述によると、久我暇は馬が足をとられるような田んぼの畦道でした。絵図にも描かれており、江戸時代には参勤交代で利用されていました。その後、明治から戦後しばらくまでの地図には、久我から山崎までの約6km分が痕跡としてみられますが、名神高速道路や国道171号線ができて工業地帯が発達すると、神足から久我あたりでは、久我暇は開発のため姿を消していきます。

しかし、それらの開発に伴う発掘調査で、久我暇の変遷が考古学的に明らかになりました。敷設当初は2本の溝に挟まれる幅約10mの道路で、ある時期に部分的に石で舗装されていたこと、そして中世後半にはそれまでの路面に盛土をした土手状の道になり、改修を繰り返して現在に至っています。残念ながら、造営時期が平安京造営時に遡るかどうかは不明ですが、その後の文献に見られる久我暇の様子とほぼ一致しています。今では久我暇を実際に歩くことは難しくなりましたが、古い地図を遡っていくとその姿をたどることができます。(松尾史子)



久我暇と調査地点



A : 中世前半までの道路 B・C : 中世後半以降の道  
久我暇概念図

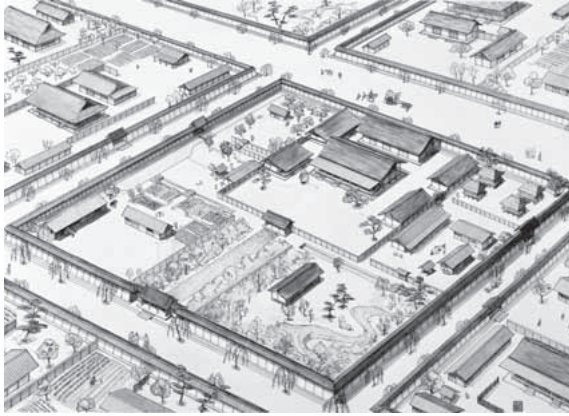


久我暇の位置

(高橋美久仁『古代の交通と考古地理』に加筆)



## 平安京の邸宅



邸宅の復元イラスト



中心建物（京都府教育委員会提供）



四脚門跡（南門）

のランクの高さをさらに物語ってくれました。

残念なことに、邸宅の所有者については、文献に残っておらず学問的に確定することは困難です。

見つかった遺構群は重要なものとされ、地下保存されました。そして、昭和58年に京都府指定史跡の第1号として指定されました。また、四脚門跡も地下保存されています。校内には案内板が設置され、四脚門については、柱跡を明示する施設が作られています。（村田和弘）

京都市北区大將軍坂田町にある京都府立山城高等学校の校舎改築に先立つ発掘調査によって、大規模な邸宅跡がみつかりました。平安京の条坊では、右京一条三坊九町に該当します。

昭和54・55年度の発掘調査では、平安時代初期の大規模な建物群は寢殿を中心に「コ」の字形に配置されていたことが確認されました。この建物群は貴族の邸宅跡として注目されました。また、平成10・11年度の調査では、邸宅の中心建物である寢殿の真南で、鷹司小路<sup>たかつかさこうじ</sup>に面して南門跡が検出されました。南門跡の検出によって、九町の邸宅は1町（約14,400㎡）の規模をもつ宅地であったことが確定されました。

南門跡は6つの柱穴で構成され、格式の高いとされる四脚門<sup>しきやくもん</sup>であったことがわかりました。四脚門跡としては、平安京でこれほど明確に検出されたのははじめてでした。四脚門は二本の門柱と四本の脚柱から構成され、社寺や邸宅の正門に採用されています。現存する例として、京都市内では鎌倉時代の東福寺月下門などがあります。平安時代のものとしては、鳥取県倉吉市伯耆国分尼寺の南門（復元建築）があります。

右京一条三坊九町でみつかった1町分の宅地に建てられた「コ」の字形の大規模な建物群と四脚門跡は、九町の邸宅の計画性と貴族

## 荘園領主の館

平安時代末期、権勢を誇った平氏政権にあって第2位の地位にあった平頼盛は、丹波国六人部荘(現福知山市上六人部、中六人部、下六人部)の領家(荘園領主)でした。本家(荘園領主)は八条院で、全国に莫大な荘園を持っていました。この六人部荘は福知山盆地の南東部の、京都北部の大河川である由良川に注ぐ土師川と竹田川とが合流するところにありました。

この合流地点を望む高台に、大内城跡がありました。中世の城として考えられていましたが、発掘調査によって、平安時代末期から鎌倉時代にかけては荘園領主の館であったことが判明しました。土塁で囲まれた一辺80~100mの方形の館内に、西面する主殿を中心に、北に倉・台所など、南に井戸と馬小屋などの施設が配置されていました。西部に建物はなく広場でした。

屋敷内では多数の中国製陶磁器が使用されていたことがわかりました。種類は中国南部の白磁皿と白磁碗をはじめとして、青磁皿と青磁碗(同安窯と竜泉窯)、青白磁合子や小壺があります。平氏は日宋貿易を推し進めました。このことが、貿易陶磁器が大量に出土した理由と考えます。

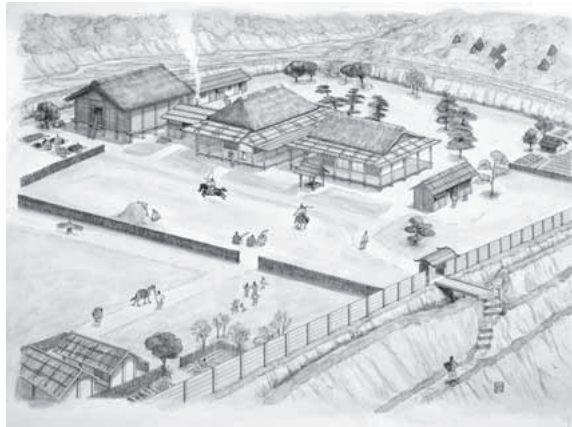
平氏は壇ノ浦の戦いで滅亡しますが、ひとり頼盛だけは八条院の庇護を受けて助かります。

鎌倉時代初期に下六人部を中心に六人部新荘が

でき、平高盛という人物が現地の荘官として勤めており、「盛」という名を持つことから、あるいは頼盛の子の可能性もあります。少なくとも、平氏一族であることは間違いなく、鎌倉時代になっても、頼盛一族の勢力が根づいていたことを窺わせます。

大内城跡は近畿自動車道舞鶴線建設に伴って、発掘調査が実施されました。現在、中六人部の大内には、荘園領主の館の東北隅にあった館創設者の墓が、道路のそばに保存されています。

(伊野近富)



大内城跡復元イラスト



中国製陶磁器



中国製陶磁器



## 丹波国府の謎

国府とは地方行政機関の中央官庁のことです。京都府でいえば京都府庁のようなものでしょう。現在の市町村を総括する律令国家の要としての機能をもっていました。

丹後・丹波の両国はもとは一つの国であり、和銅6(713)年に分割されました。桑田・船井・何鹿・多紀・氷上・天田の各郡が丹波国に属し、現在の京都府北部から兵庫県篠山地方、大阪府能勢の一部まで含めた広大な地域を含んでいました。

では、丹波国府はどこにあったのでしょうか。

実は、現在でも丹波国府と特定できた遺跡はありません。しかし、候補地をあげることはできます。時代順に並べたのが下記の遺跡です。

【奈良時代前半】 亀岡市馬路町池尻に存在する池尻遺跡が国府の可能性が高いと考えています。この遺跡では、堀に囲まれた敷地内に大型建物が整然と建ち並んでいたことがわかりました。こうした区画が複数存在することから、初期の国府の可能性が高いものと考えています。

【奈良時代後半から平安時代前半】 亀岡市千代川町の千代川遺跡が有力な候補地です。この遺跡からは、大型の建物や区画施設は見つかりませんが、調査で数多くの墨書土器などが見つかり、国府であった可能性を示しています。

【平安時代後期から鎌倉時代】 場所は特定できませんが、現在の八木町屋賀にあった可能性が、承安4(1174)年の年紀のある「丹波国吉富庄絵図」から見て取れます。平安時代後期から国府は衰退し、以後、武士の時代が到来したため、国府はますますその力が無くなっていったと考えられています。

以上のように、丹波国府の位置は未だ確定できていません。今後の発掘調査や様々な研究に期待が寄せられています。

(石崎善久)



池尻遺跡の大型建物



千代川遺跡遠景



千代川遺跡出土遺物



## 尊勝寺と六勝寺

平安時代の後期、洛東の白河（現在の京都市左京区岡崎）の地は白河街区として開発が進められていました。街区の一面には、歴代天皇の御願寺が6ヶ寺建立され、いずれも寺の名に「勝」の字をもつことから六勝寺と総称されていました。六勝寺は建立順に並べると、法勝寺（白河天皇）承暦元（1077）年、尊勝寺（堀川天皇）康和4（1102）年、最勝寺（鳥羽天皇）元永元（1118）年、円勝寺（鳥羽天皇皇后待賢門院璋子）大治3（1128）年、成勝寺（崇徳天皇）保延5（1139）年、延勝寺（近衛天皇）久安5（1149）年となります。これら六勝寺は、鎌倉時代までは再建や修理が行われていましたが、天皇の力が衰退すると次第に荒れ果て、最後は応仁の乱（1467～1477年）で焼亡してしまいました。

当センターでは、六勝寺関連の調査として1986年に推定尊勝寺寺域内で発掘調査を実施しました。尊勝寺跡は、現在の京都会館とその周辺を含み、調査地は京都会館北西の府営西天王町団地敷地内に位置します。建物改築に伴う発掘調査で、礎石建物の基壇跡・礎石・礎石据付跡・雨落ち溝・瓦を廃棄した穴などが見つかり

ました。建物跡の身舎は東西の桁行6間（21.6m）×南北の梁間2間（7.2m）の規模となります。身舎の周囲には柱を2重に巡らせた庇と孫庇があり、孫庇礎石でみる建物規模は東西約33m×南北約19.2mを測ります。

鎌倉時代の文献『中右記』によれば、尊勝寺観音堂には6体の観音像の記述がみられます。観音像の数と身舎の桁行6間の数が合致することから、検出した建物跡は尊勝寺観音堂とみられています。現在、観音堂跡は礎石や礎石抜き取跡を避けて建物基礎が配置されたことから、多くの遺構は現存住宅の下で保存されました。

（竹原一彦）

アクセス：東山二条バス停より北東へ徒歩約5分。現地に説明板あり。



推定観音堂跡（上が北）

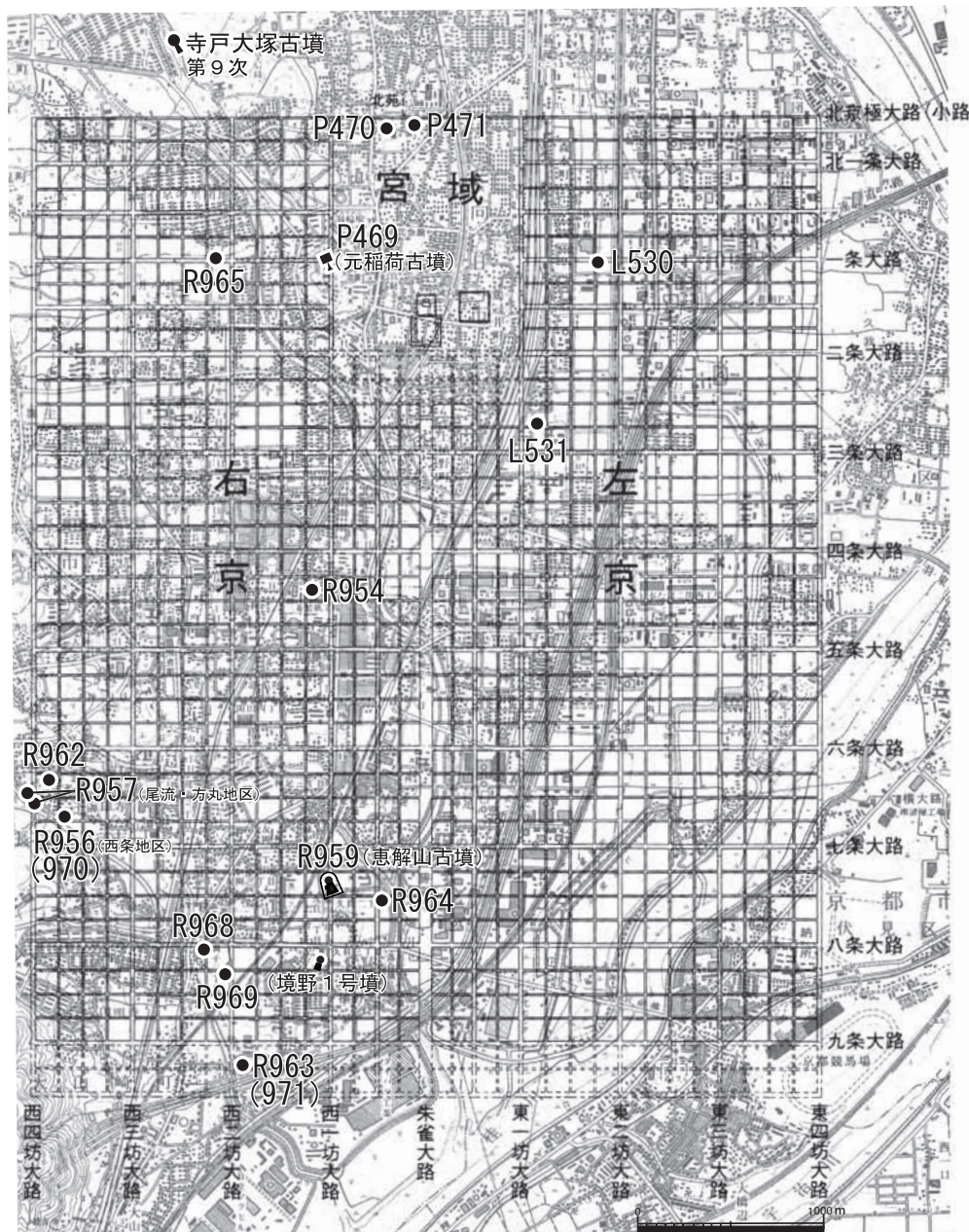


推定観音堂跡（南東から）

## 長岡京跡調査だより・105

長岡京跡発掘調査の情報交換及び資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成21年2月から4月には、18件の調査報告があった。そのなかで、重要な成果が得られたものについて報告する。

宮跡第469次調査(向日市向日町)では、元稻荷古墳の墳丘裾の調査が実施され、後方部墳丘の



調査地位置図 (1/40,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。



規模が確定し、詳細な構造が判明した。出現期の古墳に通有の裾廻り礫敷きを備える反面、タイル状に貼られた立石状の根石による基底部標示は認められなかった。吉備系の特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪、及び讃岐系二重口縁土器が出土した。

左京第530次調査(向日市鶏冠井町)では、長岡京の一条大路と東二坊坊間東小路の交差点位置で、路面側溝が良好に検出された。また、縄文時代後期後半(宮滝式)の土器・石器資料を共伴する平面形がいびつな円形の土坑状遺構を2か所確認した(石田遺跡)。土坑状遺構は、周囲に土堤が巡る様相を呈し、周堤をもつ竪穴式住居跡の可能性が指摘された。

右京第954次調査(長岡京市開田)では、長岡京条坊の施工を示す道路側溝と、これに面する宅地内で掘立柱建物跡と井戸を検出するとともに、都の造営の際に破壊された古墳を4基確認した(開田古墳群)。古墳は墳丘の一辺が6～15mの小規模な方墳で、最も規模が大きな13号墳の周溝内から、円筒埴輪(普通円筒・朝顔形円筒)、器財埴輪(家・盾・蓋・甲冑・鞞)、動物埴輪(鶏・馬)や須恵器の食器類、土師器、馬骨が出土した。5世紀後半の築造時期が考えられる。

右京第959次調査(長岡京市勝竜寺)では、乙訓地域最大(全長128m)の前方後円墳である恵解山古墳(国指定史跡)で、主として後円部の規模や構造を確定するための調査が実施された。調査の結果、東側くびれ部にも造り出しが存在することが新たに判明した。また、各所で埴輪列・葺石が施された墳丘斜面・テラスを確認した。

右京第962次調査(長岡京市下海印寺)では、縄文時代から中世にかけての多様な遺構・遺物が検出された(下海印寺遺跡)。とくに、縄文時代の成果として、早期(高山寺式)・中期(船元Ⅰ・Ⅱ式)の土器資料が新たに得られたとともに、後期(北白川上層式)の土器埋設遺構や掘立柱建物跡・竪穴式住居跡が検出された。

右京第963次調査(大山崎町円明寺)では、現在の小泉川の厚い洪水堆積層の下部に被覆されるかたちで、古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出された。竪穴の一辺が7mと規模が大きく、周辺に展開する古墳時代集落(松田遺跡)の広がりを知る上で有効な資料となった。

右京第964次調査(長岡京市久貝)では、南栗ヶ塚遺跡として昨年度、縄文時代前期の集落関連遺構が発見された地点に隣接しているが、当該期の遺構は確認されず、代わって弥生時代前期の土坑と古墳の周溝が検出された。

長岡京の北西に立地する寺戸大塚古墳(京都市西京区大枝)の墳丘調査が実施された。この古墳は、前方部と後円部に各1基の竪穴式石槨を有する全長約98mの古墳時代前期の前方後円墳である。従前から向日市域の調査が実施されていたが、京都市側の調査が初めて実施され、3段築成の下部2段の墳丘斜面の葺石およびテラスの埴輪列が確認された。また、前端部西側の調査成果から、前方部の墳形が前端に向かって左右に開く「撥形」を呈する可能性が指摘された。

(伊賀高弘)



## 普及啓発事業（2月末～6月）

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業等の普及啓発活動を行っています。

### 埋蔵文化財セミナー

第112回埋蔵文化財セミナーを平成21年2月28日（日）に木津川市中央交流会館いずみホールで開催しました。今回のテーマは、「天平の貴族と万葉木簡」と題して実施しました。恭仁宮跡の最新の調査成果や万葉歌木簡が出土した馬場南遺跡について、現地を担当した講師から報告しました。当日の参加者はホールが満席となる312名を数え、天平ロマンに思いをはせていただき、盛況裏に終わることができました。また、このセミナーを前後する2月25日から3月4日まで、府立山城郷土資料館で速報企画展「馬場南遺跡―謎の寺 神雄寺」を開催しました。

第113回埋蔵文化財セミナーを6月13日（土）長岡京市立中央公民館で「京都府南部の縄文



第113回埋蔵文化財セミナー

社会」と題して開催しました。近年話題となっている縄文時代の調査成果とあって、参加者も190名を数え、4000年以上前の墓や暮らしについて、驚嘆しながら聴講いただきました。

### 現地説明会

精華町にある鞍岡山2号墳の調査では、5世紀初めの30m級の円墳であることが判明しました。一つの墓坑内から2基の木棺が検出され、副葬品から男女が葬られたのではないかと推測されました。3月7日（土）に現地説明会を行い、250名の方々に古墳の墳丘上に順次登っていただき説明いたしました。

### 出前授業・遺跡見学

6月は、小学6年生の歴史授業の一環として、出前授業や遺跡見学が相次ぎました。短時間ではありましたが、各小学校近隣の歴史を古代の土器や石器に触れながら、熱心に学んでいただきました。



羽束師小学校出前授業

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成21年6月1日現在)

理事長

上田正昭  
(京都大学名誉教授)

副理事長

中尾芳治  
(恭仁宮跡調査専門委員会委員長)

常務理事

小池 久

理事

石野博信  
(兵庫県立考古博物館長)

井上満郎  
(京都産業大学文化学部教授)

都出比呂志  
(大阪大学名誉教授)

中谷雅治  
(元京都府教育庁指導部理事文化財保護課長事務取扱)

高橋誠一  
(関西大学文学部教授)

増田富士雄  
(京都大学名誉教授・同志社大学理工学部教授)

上原真人  
(京都大学大学院文学研究科教授)

山内 一  
(京都府文化環境部文化芸術室長)

高熊秀臣  
(京都府教育庁指導部長)

川村 智  
(京都府教育庁指導部文化財保護課長)

監事

大槻 茂  
(京都府企画理事・危機管理監兼会計管理者)

橋本幸三  
(京都府教育庁管理部長)

事務局長

小池 久

副局長

安田正人

総務課

長 安田正人(兼)

総務係長 杉江昌乃

主任 今村正寿

主事 鍋田幸世

主事 須田千春

副主査 橋本清一

(再任用：府立山城郷土資料館へ派遣)

調査第1課

課長 肥後弘幸

主幹 水谷壽克

企画係長 水谷壽克(事務取扱)

主査調査員 伊賀高弘

資料係長 岩松 保

主任調査員 田中 彰

調査第2課

課長 肥後弘幸(兼)

総括調査員 小山雅人

主幹 石井清司

課長補佐 小池 寛

調査第1係長 小池 寛(兼)

次席総括調査員 辻本和美

次席総括調査員 田代 弘

主任調査員 引原茂治

主任調査員 竹原一彦

専門調査員 黒坪一樹

主査調査員 柴 暁彦

調査第2係長 森 正

主任調査員 松井忠春

主任調査員 戸原和人

主任調査員 増田孝彦

主任調査員 中川和哉

主任調査員 森島康雄

専門調査員 岡崎研一

調査員 奈良康正

調査第3係長 石井清司(事務取扱)

次席総括調査員 伊野近富

専門調査員 竹井治雄

専門調査員 石尾政信

調査員 高野陽子

調査員 筒井崇史

調査員 村田和弘

調査員 松尾史子

## センターの動向

(平成21年3月～平成21年6月)

月	日	事	項
3	1	おとくにスライド会(於：長岡京市)中川和哉主任調査員派遣	
	2	木津川河床遺跡(八幡市)現地説明会(82名参加) 上原真人理事(特史・特名)慈照寺庭園現地視察	
	3	人権教育行政担当者等研究協議会(於：向日市)田中彰・戸原和人・増田孝彦・中川和哉主任調査員、伊賀高弘主査調査員、筒井崇史・松尾史子調査員受講	
	4	府立山城郷土資料館速報企画展「馬場南遺跡一謎の寺 神雄寺」閉館(6日間、775名鑑賞)	
	6	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(於：奈良市)安田正人事務局次長、杉江昌乃総務係長、鍋田幸世主事出席 (特史・特名)慈照寺庭園発掘調査終了(2/2～)	
	7	鞍岡山古墳群(精華町)現地説明会(250名参加)	
	9	鞍岡山古墳群・下馬遺跡・片山遺跡発掘調査終了(11/11～)	
	10	長岡京跡・松田遺跡発掘調査終了(1/26～) 木津川河床遺跡発掘調査終了(11/13～)	
	11	中尾芳治副理事長(特史・特名)慈照寺庭園現地視察	
	16	職員人権研修「平成20年度を振り返って一事例報告と討議一」	
	18	長岡京連絡協議会	
4	27	第85回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、中西和之常務理事・事務局長、石野博信・都出比呂志・中谷雅治・高橋誠一・小池久各理事出席	
	31	退職職員辞令交付 (別掲)	
	1	採用職員辞令交付 (別掲)	
	3	職員研修「埋蔵文化財担当者等講習会に参加して」講師黒坪一樹専門調査員、「奈文研研修・寺院遺跡調査過程について」講師松尾史子調査員	
	6	健康診断保健指導	
	8	長岡京跡(長岡京市・第二外環)発掘調査開始	
	21	長岡京跡・松田遺跡(大山崎町・府道)発掘調査開始 天田内遺跡(福知山市)発掘調査開始	
	22	長岡京連絡協議会 小池久常務理事・事務局長中丹地域現地視察 蔵垣内遺跡(亀岡市)発掘調査開始 長岡京跡(長岡京市・二外府道)発掘調査開始	
	28	職員人権研修「平成20年度を振り返って」、「ビデオ視聴」	
	30	河守北遺跡(福知山市)発掘調査開始	
	5	8	深志野古墳群(京丹波町)発掘調査開始
16		奈良女子大学附属中学SSH基礎講座 森島康雄主任調査員講師派遣	



- 18 大谷口遺跡(南丹市)発掘調査開始
- 25 小池久常務理事・事務局長乙訓地域現地視察
- 27 上原真人理事馬場南遺跡遺物指導  
長岡京連絡協議会
- 28 職場研修「平成20年度京都府内の発掘調査―市町村調査分―」講師肥後弘幸調査第1・2課長
- 6 2 泉拓良京都大学大学院教授縄文土器指導
- 4 福知山市立美鈴小学校・有仁小学校、天田内遺跡(福知山市)現地見学  
京都市立羽束師小学校出前授業(水谷壽克調査第1課主幹、伊賀高弘主査調査員)
- 5 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：大阪市)小山雅人総括調査員、岩松保資料係長出席
- 8 笠置町立笠置小学校出前授業(小池寛調査第2課課長補佐)
- 10 長岡京跡・松田遺跡(府道)発掘調査終了(4/21～)
- 11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：北海道)小池久事務局長、安田正人事務局副局長、杉江昌乃総務係長  
企業内人権啓発推進員研修会及び学卒求人説明会 石井清司調査第2課主幹出席  
福知山市立美河小学校出前授業
- 12 河守北遺跡地元説明会(参加者30名)  
天田内遺跡地元説明会(参加者10名)  
天田内遺跡発掘調査終了(4/21～)
- 13 第113回埋蔵文化財セミナー(於：長岡京市民ホール 参加者191名)
- 15 補助監査
- 16 上田正昭理事長、小池久常務理事・事務局長、上野誠奈良大学教授馬場南遺跡現状確認
- 19 京都府庁開庁記念式典(於：京都市)小池久常務理事・事務局長出席
- 20 近畿弥生の会 講師筒井崇史調査員講師派遣
- 22 監事監査
- 24 長岡京連絡協議会
- 25 南丹市立新庄小学校出前授業(辻本和美次席総括調査員)
- 26 第86回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、小池久常務理事・事務局長、都出比呂志・中谷雅治・井上満郎・増田富士雄・上原真人・山内一・川村智各理事、橋本幸三監事出席

(別掲)

月	日	事	項
3	31	中西和之常務理事・事務局長 橋本清一専門調査員 定年退職 石崎善久調査第2課調査員 退職 (府派遣解除)	退任
4	1	小池久常務理事・事務局長 奈良康正調査第2課調査員 採用 (府派遣) 須田千春総務課主事 採用 (府派遣)	就任

### 編集後記

情報 109 号が完成しましたのでお届けします。

本号では、万葉歌木簡の出土で世間の耳目を集めた馬場南遺跡の調査成果とその提議する問題を紹介しています。馬場南遺跡の万葉歌木簡や多種多様な出土遺物は、ひとり考古学だけの問題にとどまらず、古代史・国文学などにも大きな波紋を投げかけることがわかるかと思えます。

平成 20 年度京都府内における発掘調査とその周辺では、昨年度に実施された府下の遺跡調査を中心に、考古学・文化財保護におけるニュースも紹介しています。

今回も盛りだくさんの内容になりました。お楽しみください。

(編集担当 岩松 保)

**京都府埋蔵文化財情報 第109号**

平成21年7月31日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141





KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER